

『楞伽經』が説く「見える」ものや「見えない」もの：

〈「真我」〉は「常道」であり、〈初期状態の「阿頼耶識」〉は「一なる」ものである

The Initial State of “Ālaya-vijñāna” corresponds to “the One” of the Early Daoist Theory

外村中

はじめに

大乘仏教においては、〈個別の我なるもの〉の存在は、否定されていた<sup>1)</sup>。では、無我なのかといえば、必ずしもそうではなく、無なるものでも有なるものでもない（すなわち空なる）ものが住する（在する、存する）とされていた<sup>2)</sup>。それにより、大乘の經典では、「見えない」ものとされるブッダ（正確にはその身体すなわち仏身）は、多くの場合、空なるもののように説かれている。一方、〈（すべてのものが共有するような）総体的に根本たる我なるもの〉についての理論には、展開の余地が残されていたようである。

そして、それにより展開されたものが、たとえば、『（大乘）涅槃經』や『金光明經』新本が説く仏身論らしい<sup>3)</sup>。両經典が説くところによれば、それまで多くの場合、「見えない」もので、廣大無限なるもので、空なるものとされていた「法身」（いわば総体的に根本たる真理としての仏身）は、実のところは、「見えない」ものではなく、ブッダには「如如たる」（すなわち、あるがままに「見える」）ものとされる。そして、そのような「如如たる」もので、常なるもの（すなわち、それまでいわば絶対的に空なるものととらえられていたもの）は、実のところは、我なるもの（いわば絶対的に有なるもの）とされ、「法身」は常樂我淨なるものとされる。

以上に対して、『楞伽經』が説く仏身論は、中観派（いわば空なるものを教義の中心とするグループ）の考え方にもとづきつつ、さらに展開（あるいは調整）が加えられたものといえそうである。具体的には、『楞伽經』においては、「法身」は、我なるものではなく、やはり空なるものとされるようである。また、我なるものは、「法身」（すなわち「真如」）ではなく、「法身」を発現する（させる）「真我」（すなわち「真如」の「我」）とされるらしい。そして、『楞伽經』が説く仏身論は、式化すれば、次のようになりそうである。

〈①「X」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③「心」が「X」に変化したもの〉

〈①（広義の）「法身」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③「心」が（広義の）「法身」に変化したもの〉

〈①究極の「法身」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③初期状態の「心」〉

<sup>1</sup> 渡辺照宏「真如」（『インドの思想』著作集第1巻（筑摩書房、1982年）、65-103頁、71-72頁。

船山徹『六朝隋唐仏教展開史』（法藏館、2019年）、41頁。

<sup>2</sup> たとえば、次も参考になろう。『維摩詰所説經』（巻1）弟子品第三 T14,541a「於我無我而不二。是無我義。（新国訳 21-22）」

<sup>3</sup> 『大乘涅槃經』および『金光明經』については、別稿を参照。

以上は、偶然ながら、道家系が説く「道」の理論に近似するものといえそうである。道家系が説くところは、式化すれば、次のようにも表せよう<sup>4)</sup>。

〈①(広義の)「道」〉 = 〈②「常道」〉 + 〈③「一なる」もの〉

以上の近似性については、従来の研究においては、注意が払われていないようにも思われるが、それぞれの思想における根本たるものに関わるものであるから、十分に検討されておかれるべきものであろう。また、『楞伽經』は、東アジアにおいては、『金剛般若經』などととも、禅宗によって最も重んじられてきた經典の一つである<sup>5)</sup>。したがって、その内容は、禅宗に関わる文物や芸術を解釈する上でも、正確に理解されておかれるべきものであろうが、現状は必ずしもそうではなさそうである。

そこで、小稿では、これからの総合的な研究の準備として、漢訳『楞伽經』から情報を抽出し、初歩的な考察を加えながら、とくに「真我」にまつわる仏身論に関して、以上のように考える理由を整理する<sup>6)</sup>。なお、小稿は東アジアに関わる研究の一環であるから、梵本をもつての詳細な検討は将来の課題とし、ここでは漢訳三種を用いて分析する。漢訳語については、現存三訳中で最もわかりやすく要を得ているとされる『大乘入楞伽經』のものをできる限り優先するが<sup>7)</sup>、理解をスムーズにするために、そうしない場合もある。『涅槃經』および『金光明經』新本までの仏身論や道家系が説く「道」の理論などについては、これまでの別稿を参照いただきたい。

## 1. 漢訳『楞伽經』三種

先ずは、書誌的な情報から確認するに<sup>8)</sup>、いわゆる『楞伽經』の漢訳は、三種が現在に伝わっている。それらは古いものから順に、次のとおりである。

①宋の求那跋陀羅(共通暦紀元後 394-468 年)が元嘉二十年(443)に訳出した『楞伽阿跋多羅宝經』(いわゆる宋訳四卷本)。

②北魏の菩提流支(527 年没)が延昌二年(513)に訳出した『入楞伽經』(いわゆる魏訳十卷本)。

---

<sup>4)</sup>別稿「道家(老荘)が説く」『参考資料集』、73-100 頁を参照。なお、『孟子』が説く理論も同様なものらしく、次のように式化できそうである。〈①聖人の「道」〉 = 〈②「天」〉 + 〈③初期状態の「心」〉

<sup>5)</sup>次を参照。高崎直道・堀内俊郎(校註)『楞伽經(楞伽阿跋多羅宝經)』新国訳大蔵經 8、如来蔵・唯識部 2(大蔵出版、2015 年)、23-25 頁。

<sup>6)</sup>小稿では、データベースとして、CBETA を利用する。その漢訳原文については、筆者の判断により文章のリズムを優先して句読点を改めるところもある。また、わかりやすいように下線などをほどこす場合もある。なお、新国訳とは新国訳大蔵經、一切とは國譯一切經、国訳とは國譯大蔵經を意味する。

<sup>7)</sup>山上曹源「大乘入楞伽經解題」(『國譯大蔵經』經部第 4 卷、國民文庫刊行會、1927 年)、33 頁。

<sup>8)</sup>たとえば、次を参照。小野玄妙(編)『佛書解説大辞典』第 11 卷(大東出版社、1967 年)、254-255 頁、「楞伽經」(和田徹城解題)。鈴木大拙「楞伽經」(『鈴木大拙全集』増補新版第 5 卷、岩波書店、2000 年)、457-507 頁、463-476 頁。

③唐の実叉難陀（652-710年）が久視元年（700）から長安四年（704）に訳出した『大乘入楞伽經』（いわゆる唐訳七卷本）。

また、梵本も伝わり、その内容は基本的には魏訳および唐訳と同じとされ、原典は後四世紀末の成立かとされる<sup>9)</sup>。また、①宋訳にはなく、②魏訳および③唐訳にはある陀羅尼品および偈頌品（總品）は、後の増広であろうとされる<sup>10)</sup>。近年の研究においては、①宋訳が読む上で難解なため、それを梵本をもって読解することに重きがおかれているようでもあるが、筆者は思うに、「見える」ものや「見えない」ものを検討する上では、後の増広であろうとされる部分にも重要な内容が認められそうである。この点は、以下小稿において抽出される偈頌品（總品）の情報量の多さからも理解されよう。

◆なお、偈頌品（總品）に説かれる次によれば、『楞伽經』の教えは、南天竺の龍樹（ナーガールジュナ、後150年頃-250年頃）に継承されるとされる。

◇『入楞伽經』（卷9）總品第十八之一 T16,569a「我乘内證智。妄覺非境界。如來滅世後。誰持為我説。如來滅度後。未來當有人。大慧汝諦聽。有人持我法。於南大國中。有大德比丘。名龍樹菩薩。能破有無見。為人説我法。大乘無上法。證得歡喜地。往生安樂國。（一切189）」

◇『大乘入楞伽經』（卷6）偈頌品第十之初 T16,627c「自内所證乘。非計度所行。願説佛滅後。誰能受持此。大慧汝應知。善逝涅槃後。未來世當有。持於我法者。南天竺國中。大名德比丘。厥號為龍樹。能破有無宗。世間中顯我。無上大乘法。得初歡喜地。往生安樂國。（国訳216）」

龍樹は中觀派の始祖とされる人物であるから<sup>11)</sup>、以上は、『楞伽經』が中觀派系の經典であることをしめすものといえよう<sup>12)</sup>。

## 2. 諸經典との関連

### 2-1. 『般若經』との関連

◆『楞伽經』の内容は、般若波羅蜜（要するに智慧の完成）を説く『般若經』系の經典と強い関連をもつものである。たとえば、『華嚴經』十地品（あるいは単独經典としては『十地經』）では、十地（すなわち十ある修行段階）の内の第六地で般若波羅蜜が修められるとされ、さらに高次の第七地から第十地では、般若波羅蜜とは異なる波羅蜜が修められると説かれる<sup>13)</sup>。一方、次によれば、『楞伽經』では、①衆生のレベルに相当する世間波羅蜜、②声聞縁覺のレベルに相当する出世間波羅蜜、③菩薩のレベルに相当する出世間上上波羅蜜という

<sup>9)</sup> 高崎直道・堀内俊郎（校註）『楞伽經（楞伽阿跋多羅寶經）』、2015年、25頁、76頁。

<sup>10)</sup> 次によれば、陀羅尼品および偈頌品は後世の附加であろうとされる。小野玄妙（編）『佛書解説大辞典』第11巻、1967年、255頁。山上曹源「大乘入楞伽經解題」、1927年、2頁。なお、『楞伽經』の構造から成立史を詳しく考察した論考として、次がある。久保田力「『楞伽經』の形態的成立史論：内部構造と原型への視点」（『論集＝RONSHU』11、1984年）、67-96頁、89-90頁。

<sup>11)</sup> 船山徹『仏教の聖者：史実と願望の記録』京大人文研東方学叢書8（臨川書店、2019年）、227-228頁。

<sup>12)</sup> 次によれば、『入楞伽經』は、瑜伽唯識の学派とは系統を異にするものらしく、唯識説に対しては批判的であるとする。安井広済（訳）『入楞伽經：梵文和訳』（法蔵館、1976年）、3-4頁。

<sup>13)</sup> 『華嚴經』の十波羅蜜については、次を参照。高崎直道『大乘仏教思想論Ⅱ』高崎直道著作集第3巻（春秋社、2009年）、325-328頁。

三種類の六波羅蜜があり、最高の波羅蜜（したがって『華嚴經』十地品であれば第十地で修められる智波羅蜜に相当するもの）として、出世間上上波羅蜜に属する般若波羅蜜があるとされる。このように般若波羅蜜を最高の波羅蜜と位置づけている点は、『般若經』系の經典との強い関連をしめすものとして注目されよう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 3）一切佛語心品之三 T16,500c-501a「復次。大慧。智識相。今當說。若善分別。智識相者。汝及諸菩薩。則能通達。智識之相。疾成阿耨多羅三藐三菩提。大慧。彼智有三種。謂①世間。②出世間。③出世間上上智。云何①世間智。謂。一切外道凡夫。計著有無。云何②出世間智。謂。一切聲聞緣覺。墮自共相。惛望計著。云何③出世間上上智。謂。諸佛菩薩。觀無所有法。見不生不滅。離有無品。入如來地。人法無我。緣自得生。大慧。彼生滅者是識。不生不滅者是智。復次。墮相無相。及墮有無種種相因是識。超有無相是智。復次。長養相是識。非長養相是智。復次。有三種智。謂。知生滅。知自共相。知不生不滅。復次。無礙相是智。境界種種礙相是識。復次。三事和合生方便相是識。無事方便自性相是智。復次。得相是識。不得相是智。自得聖智境界。不出不入。故如水中月。（新国訳 132-134）」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 4）一切佛語心品之四 T16,512b-c「大慧菩薩。復白佛言。世尊。如世尊說。六波羅蜜滿足。得成正覺。何等為六。佛告大慧。波羅蜜有。三種分別。謂①世間。②出世間。③出世間上上。大慧。①世間波羅蜜者。我我所。攝受計著。攝受二邊。為種種受生處。樂色聲香味觸故。滿足檀波羅蜜。戒。忍。精進。禪定。智慧。亦如是。凡夫神通。及生梵天。大慧。②出世間波羅蜜者。聲聞緣覺。墮攝受涅槃故。行六波羅蜜。樂自己涅槃樂。③出世間上上波羅蜜者。覺自心現。妄想量攝受。及自心二故。不生妄想。於諸趣攝受非分。自心色相不計著。為安樂一切眾生故。生檀波羅蜜。起上方便。即於彼緣。妄想不生戒。是尸波羅蜜。即彼妄想不生忍。知攝所攝。是羸提波羅蜜。初中後夜。精勤方便。隨順修行方便。妄想不生。是毘梨耶波羅蜜。妄想悉滅。不墮聲聞。涅槃攝受。是禪波羅蜜。自心妄想非性。智慧觀察。不墮二邊。先身轉勝。而不可壞。得自覺聖趣。是般若波羅蜜。（新国訳 206-207）」

◇『入楞伽經』（卷 5）佛心品第四 T16,544a-b「復次。大慧。我今為汝。說智識相。汝及諸菩薩摩訶薩。應善知彼。智識之相。如實修行。智識相故。疾得阿耨多羅三藐三菩提。大慧。有三種智。何等為三。一者①世間智。二者②出世間智。三者③出世間上上智。大慧。識者生滅相。智者不生滅相。復次。大慧。識者墮於有相無相。墮彼有無種種相因。大慧。智相者遠離。有相無相。有無因相。名為智相。復次。大慧。集諸法者。名為識相。不集諸法。名為智相。大慧。智有三種。何等為三。一者觀察。自相同相。二者觀察。生相滅相。三者觀察。不生不滅相。大慧。何者①世間智。諸外道凡夫人等。執著一切。諸法有無。是名世間智相。大慧。何者②出世間智。謂諸一切。聲聞緣覺。虛妄分別。自相同相。是名出世間智。大慧。何者③出世間上上智。謂佛如來。菩薩摩訶薩。觀察一切。諸法寂靜。不生不滅。得如來地。無我證法。離彼有無。朋黨二見。復次。大慧。所言智者。無障礙相。識者識彼。諸境界相。復次。大慧。識者和合。起作所作。名為識相。無礙法相。應名為智相。復次。大慧。無所得相。名之為智。以自內身證。得聖智修行境界故。出入諸法。如水中月。是名智相。（一切 101-102）」

◇『入楞伽經』（卷 8）剎那品第十四 T16,559c-560a「大慧復白佛言。世尊。如來常說。滿足六波羅蜜法。得阿耨多羅三藐三菩提。世尊。何等為六波羅蜜。云何滿足。佛告大慧菩薩言。大慧。波羅蜜差別有三種。謂①世間波羅蜜。②出世間波羅蜜。③出世間上上波羅蜜。大慧。言①世間波羅蜜者。愚癡凡夫。執著我我所法。墮於二邊。為於種種。勝妙境界。行波羅蜜。求於色等。境界果報。大慧。愚癡凡夫。行尸波羅蜜。羸提波羅蜜。毘梨耶波羅蜜。禪波羅蜜。

般若波羅蜜。乃至生於梵天。求五神通。世間之法。大慧。是名世間諸波羅蜜。大慧。言②出世間波羅蜜者。謂聲聞辟支佛。取聲聞辟支佛涅槃心。修行波羅蜜。大慧。如彼世間。愚癡凡夫。為於自身。求涅槃樂。而行世間波羅蜜行。聲聞緣覺。亦復如是。為自身故。求涅槃樂。行出世間波羅蜜行。而乃求彼。非究竟樂。大慧。③出世間上上波羅蜜者。如實能知。但是自心。虛妄分別。見外境界。爾時實知。惟是自心。見內外法。不分別虛妄分別。不取內外。自心色相故。菩薩摩訶薩。如實能知。一切法故。行檀波羅蜜。為令一切眾生。得無怖畏安隱樂故。是名檀波羅蜜。大慧。菩薩觀彼。一切諸法。不生分別。隨順清涼。是名尸波羅蜜。大慧。菩薩。離分別心忍。彼修行如實。而知能取。可取境界非實。是名菩薩。羸提波羅蜜。大慧。菩薩云何。修精進行。初中後夜。常勤修行。隨順如實法。斷諸分別。是名毘梨耶波羅蜜。大慧。菩薩。離於分別心。不隨外道。能取可取。境界之相。是名禪波羅蜜。大慧。何者菩薩。般若波羅蜜。菩薩如實。觀察自心。分別之相。不見分別。不墮二邊。依如實修行轉身。不見一法生。不見一法滅。自身內證。聖行修行。是名菩薩。般若波羅蜜。大慧。波羅蜜義。如是滿足者。得阿耨多羅三藐三菩提。(一切 154-155)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 4) 無常品第三之一 T16,610b「復次。大慧。我當為汝。說智識相。汝及諸菩薩摩訶薩。若善了知。智識之相。則能疾得。阿耨多羅三藐三菩提。大慧。智有三種。謂。①世間智。②出世間智。③出世間上上智。云何①世間智。謂。一切外道凡愚。計有無法。云何②出世間智。謂。一切二乘。著自共相。云何③出世間上上智。謂。諸佛菩薩。觀一切法。皆無有相。不生不滅。非有非無。證法無我。入如來地。大慧。復有三種智。謂。知自相共相智。知生滅智。知不生不滅智。復次。大慧。生滅是識。不生滅是智。墮相無相及以有無種種相因是識。離相無相及有無因是智。有積集相是識。無積集相是智。著境界相是識。不著境界相是智。三和合相應生是識。無礙相應自性相是智。有得相是識。無得相是智。證自聖智所行境界。如水中月。不入不出故。(国訳 123)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 剎那品第六 T16,621c-622a「大慧菩薩。復白佛言。世尊常說。六波羅蜜。若得滿足。便成正覺。何等為六。云何滿足。佛言。大慧。波羅蜜者。差別有三。所謂。①世間。②出世間。③出世間上上。大慧。①世間波羅蜜者。謂諸凡愚。著我我所。執取二邊。求諸有身。貪色等境。如是修行。檀波羅蜜。持戒。忍辱。精進。禪定。成就神通。生於梵世。大慧。②出世間波羅蜜者。謂聲聞緣覺。執著涅槃。希求自樂。如是修習。諸波羅蜜。大慧。③出世間上上波羅蜜者。謂菩薩摩訶薩。於自心二法。了知惟是。分別所現。不起妄想。不生執著。不取色相。為欲利樂。一切眾生。而恒修行。檀波羅蜜。於諸境界。不起分別。是則修行尸波羅蜜。即於不起。分別之時。忍知能取。所取自性。是則名為羸提波羅蜜。初中後夜。勤修匪懈。隨順實解。不生分別。是則名為毘梨耶波羅蜜。不生分別。不起外道。涅槃之見。是則名為禪波羅蜜。以智觀察。心無分別。不墮二邊。轉淨所依。而不壞滅。獲於聖智內證境界。是則名為般若波羅蜜。(国訳 186-187)」

## 2-2. 『金剛般若經』との関連

◆『楞伽經』が説く次のいわゆる「百八句」は、おそらくは『金剛般若經』が説くところと関連をもつものである<sup>14)</sup>。なお、『金剛般若經』はく(仮りの)Xは(実有なる)Xではな

<sup>14)</sup> 先行研究においては、『金剛般若經』との関連は検討されていないようである。たとえば、次を参照。高崎直道『楞伽經』佛典講座 17 (大蔵出版、1985年)、23-24頁。

い) とするような議論を繰り返す經典で、禪宗によって最も重んじられてきた經典の一つである。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 1) 一切佛語心品第一 T16,482b-483a 「不生句生句。常句無常句。相句無相句。... (新国訳 14-15)」

◇『入楞伽經』(卷 1) 問答品第二 T16,521b-c 「生見不生見。常見無常見。相見無相見。... (一切 26-27)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 1) 集一切法品第二之一 T16,592c-593b 「爾時。大慧菩薩摩訶薩白佛言。世尊。何者是一百八句。佛言。大慧。所謂。生句非生句。常句非常句。相句非相句。... (国訳 31-33)」

### 2-3. 『涅槃經』との関連

◆『楞伽經』は、經名をあげることにより、『涅槃經』が『楞伽經』に先行する經典であることをしめす。ただし、宋訳には『涅槃經』の經名はあげられていない。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,514b 「(世尊欲。重宣此義。而說偈言。...) 縛象與大雲。央掘利魔羅。及此楞伽經。我悉制斷肉。(新国訳 217)」

◇『入楞伽經』(卷 8) 遮食肉品第十六 T16,563c 「大慧。我於象腋。央掘魔。涅槃。大雲等。一切修多羅中。不聽食肉。亦不說肉。入於食味。(一切 166-167)」

◇『入楞伽經』(卷 8) 遮食肉品第十六 T16,564b 「(爾時世尊。重說偈言。...) 象腋與大雲。涅槃。勝鬘經。及入楞伽經。我不聽食肉。(一切 170)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 6) 斷食肉品第八 T16,624c 「(爾時世尊。重說頌言。...) 象脇與大雲。涅槃。央掘摩。及此楞伽經。我皆制斷肉。(国訳 200)」

以上は、一説によれば、世尊(すなわちシャカ)によって説かれたところとされる<sup>15)</sup>。筆者は思うに、もしそうであれば、この箇所の内容は、読み落とされてはならないであろう。というのは、以上がシャカによって説かれたところとすれば、『涅槃經』は、シャカが自らの入滅の日におこなった説法の内容を記すものであるから、『楞伽經』は、シャカが入滅後に再びシャカとして現れておこなった説法の内容を記す經典ということになるからである。たとえば、『法華經』によれば、シャカは入滅後も説法を続けるとされるが(『妙法蓮華經』(卷 5) 如来寿量品第十六を参照)、入滅後の説法の時にシャカが何と呼ばれるブツダであるのかについてはよくわからない。したがって、以上は大いに注意が払われるべき内容といえよう。ただし、『楞伽經』において、『楞伽經』説法時の世尊がはたしてシャカと呼ばれるブツダであったかどうかについての厳密なところは、よくわからないようにも思われる。たとえば、次は世尊が説いた内容とされるが、世尊=シャカとは必ずしも言い切れないであろう。要検討。

◇『入楞伽經』(卷 10) 總品第十八之二 T16,584a 「毘耶娑。迦那。及於梨沙娑。迦毘羅。釋迦。我入涅槃後。未來世當有。如是等出世。(一切 254)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 7) 偈頌品第十之二 T16,638b 「我釋迦滅後。當有毘耶娑。迦那。梨沙

---

<sup>15)</sup>たとえば、次によれば、『楞伽經』は「釈尊」が説いた教えとされる。したがって、先の内容もシャカによるものということになる。常盤大定「入楞伽經解題」(『国譯一切經』經集部 7、大東出版社、1936年)、62-70頁、62頁。

婆。劫比羅等出。（国訳 268）」

◆また、次によれば、外道は「不生不滅なる」ものとは実有なる（したがって常住不変なる、要するに実在する）ものこととするが、一方、『楞伽經』は「不生不滅なる」ものとは有なるものでも無なるものでもない（したがって、常に空なる、いわば常にある種の現象たる）ものこととするとされる。この点について、『涅槃經』は、ここにいう外道の説に立つものであるから（北本『大般涅槃經』（巻 3）金剛身品第二を参照）、經名はあげられていないが、以下はあるいは『涅槃經』に対する批判であるかもしれない。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（巻 4）一切佛語心品之四 T16,507b「佛告大慧。我説不生不滅。不同外道。不生不滅。所以者何。彼諸外道。有性自性。得不生不變相。我不如是。墮有無品。大慧。我者離有無品。離生滅。（新国訳 172）」

◇『入楞伽經』（巻 6）法身品第七 T16,552b「佛告大慧言。大慧。我所説法。不生不滅者。不同外道。不生不滅。亦不同彼。不生無常法。何以故。大慧。諸外道説。有實有體性。不生不變相。我不如是。墮於有無。朋黨聚中。大慧。我説離有無法。離生住滅相。非有非無。（一切 128）」

◇『大乘入楞伽經』（巻 5）無常品第三之餘 T16,616b「佛言。大慧。我之所説。不生不滅。不同外道。不生不滅。不生無常論。何以故。外道所説。有實性相。不生不變。我不如是。墮有無品。我所説法。非有非無。離生離滅。（国訳 156-157）」

## 2-4. 浄土經との関連

◆次には、「阿弥陀国」や「極楽界」とあり、『楞伽經』が浄土經系の經典と関連をもつものであることがしられる。なお、その内容は、無量寿仏（すなわち阿弥陀仏）の仏身も三身四種説をもってとらえ得ることをしめすものである。この点は、初期の浄土經典（たとえば『阿弥陀經』や『無量寿經』）が説くところとは大きく異なるものであるから、注目されよう。

◇『入楞伽經』（巻 9）總品第十八之一 T16,568c「報相佛實體。及所化佛相。眾生及菩薩。并十方國土。習氣法化佛。及作於化佛。是皆一切從。阿彌陀國出。（一切 187）」

◇『大乘入楞伽經』（巻 6）偈頌品第十之初 T16,627b「十方諸刹土。眾生菩薩中。所有法報佛。化身及變化。皆從無量壽。極樂界中出。（国訳 214）」

## 2-5. 『華嚴經』との関連

◆『楞伽經』には、「毘盧遮那仏」とあり、『華嚴經』系との関連が認められる。ただし、魏訳のみに記されるものであるから、要検討。

◇『入楞伽經』（巻 1）請佛品第一 T16,514c「歸命大智海。毘盧遮那佛。（一切 1）」

## 2-6. 『法華經』との関連

あるいは、以下の点は、『楞伽經』が『法華經』と関連をもつものであることを意味するものかもしれない。

◆『楞伽經』は、『法華經』と同じく、シャカが入滅後も説法を続けることをしめす（『妙法蓮華經』（巻 5）如來壽量品第十六を参照）。次は、その例といえよう。ただし、以下を説いた時に、世尊がシャカと呼ばれるブツダであったかどうかはわからない。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（巻 3）一切佛語心品之三 T16,498c「大慧復白佛言。如世尊所説。我

從某夜。得最正覺。乃至某夜。入般涅槃。於其中間。乃至不說一字。亦不已說當說。不說是佛說。大慧白佛言。世尊。如來。應供。等正覺。何因說言。不說是佛說。（新国訳 120）」

◇『入楞伽經』（卷 5）佛心品第四 T16,541c「大慧菩薩。復白佛言。世尊。如來說言。我何等夜。證大菩提。何等夜。入般涅槃。我於中間。不說一字。佛言非言。世尊依何等義。說如是語。佛語非語。（一切 92-93）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 4）無常品第三之一 T16,608b「爾時。大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。如世尊說。我於某夜。成最正覺。乃至某夜。當入涅槃。於其中間。不說一字。亦不已說。亦不當說。不說是佛說。世尊。依何密意。作如是語。（国訳 112）」

◆『楞伽經』は、『法華經』と同じく、声聞への授記を説く（『妙法蓮華經』（卷 3）授記品第六を参照）。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 4）一切佛語心品之四 T16,513a「化佛授聲聞記。非是法佛。大慧。因是故。記諸聲聞。與菩薩不異。（新国訳 210）」

◇『入楞伽經』（卷 8）化品第十五 T16,560c「應化佛為應化聲聞授記。非報佛法身佛而授記。大慧。聲聞辟支佛。涅槃無差別。（一切 157）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 6）變化品第七 T16,622b「又變化佛。與化聲聞。而授記別。非法性佛。大慧。授聲聞記。是祕密說。（国訳 189）」

◆『楞伽經』は、次のように、国王や王子らに親近すべきではないとする。『法華經』にも、同様な内容が認められる（『妙法蓮華經』（卷 5）安樂行品第十四を参照<sup>16)</sup>）。なお、この点は、『楞伽經』が国家仏教のためには必ずしも都合がよい経典ではないことを意味するものであり、『華嚴經』や『金光明經』新本とは性格を異にする経典であることをしめすものといえよう。

◇『入楞伽經』（卷 9）總品第十八之一 T16,573b「王小王王子。大臣及長者。為求於飲食。一切不得往。（一切 208）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 6）偈頌品第十之初 T16,630c「諸王及王子。大臣與長者。修行者乞食。皆不應親近。（国訳 230）」

### 3. 「楞伽」の意味

『楞伽經』の「楞伽」には、はたしてスリランカかどうかよくわからない〈地名〉としての意味合いの他に、〈入るに難しいところ〉すなわち〈「心」の境界〉としての意味合いもありそうである。

◆〈地名〉としての意味合いを確認するに、次によれば、『楞伽經』の説処は、楞伽（ランカー）山頂あるいは摩羅耶（マラヤ）山頂にある楞伽城中とされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 1）一切佛語心品第一 T16,480a「如是我聞。一時佛住。南海濱。楞伽山頂。（新国訳 1）」

◇『入楞伽經』（卷 1）請佛品第一 T16,514c「歸命大智海。毘盧遮那佛。如是我聞。一時婆伽婆。住大海畔。摩羅耶山頂上。楞伽城中。（一切 1）<sup>17)</sup>」

<sup>16</sup> なお、厳密には、『法華經』が説くところの方が、より強い意味合いをもつものと解釈される。

<sup>17</sup> 「歸命大智海。毘盧遮那佛」は、魏訳（その原典）系グループと『華嚴經』系グループとの接近をしめすものとして注目されよう。

◇『大乘入楞伽經』（卷 1）羅婆那王勸請品第一 T16,587b「如是我聞。一時佛住。大海濱。摩羅耶山頂。楞伽城中。（國訳 1）」

◆以上に関して、唐の玄奘（600/602-664 年）の『大唐西域記』によれば、スリランカに駿迦（ランカー）山があり、そこで『楞伽經』が説かれたとされる<sup>18)</sup>。

◇『大唐西域記』（卷 10）T51,934b「〔僧伽羅〕國東南隅。有駿（原注。勒鄧反）迦山。巖谷幽峻。神鬼遊舍。在昔如來於此。説駿迦經（原注。舊曰楞伽經。訛也）。（平凡 346）」

◆ところが、同じく『大唐西域記』によれば、摩羅耶山とも解釈される秣刺耶（マラヤ）山は、スリランカではなく南インドにあり、布咄洛迦（ポタラカ）山の西に位置する山とされる。

◇『大唐西域記』（卷 10）T51,932a「〔秣羅矩吒〕國南濱海。有秣刺耶山。崇崖峻嶺。洞谷深澗。…秣刺耶山東。有布咄洛迦山。山徑危險，巖谷敲傾。（平凡 337）」

したがって、〈地名〉がしめす『楞伽經』の説処についての正確なところは、よくわからないことになってしまうのである<sup>19)</sup>。要検討。

◆次に、〈入るに難しいところ〉としての意味合いを確認するに、唐の法蔵（644-712 年）の『入楞伽心玄義』によれば、『楞伽經』の経名は、「下りて〈入るに難しいところ〉に入る」というような意味とされる。

◇『入楞伽心玄義』（卷 1）T39,429c「初翻名者。梵言楞伽。此云難入。亦云險絶。復云可畏。亦曰莊嚴。阿伐哆陀羅。此云下入。…」

一説によれば、〈入るに難しいところ〉とは〈自覚聖智の境界〉とされる<sup>20)</sup>。筆者は思うに、まさにそのとおりであろう。なお、〈自覚聖智〉とは、後述するとおり、『楞伽經』が説く他の言葉に置き換えるならば、すなわち〈「心」〉（正確には変化する前の〈初期状態の「心」〉あるいはその成分のようなもの）のことらしい。また、『楞伽經』が説く「心」とは、今日の日本語でいう「心」よりは、むしろその根底をなす（いわば深層心理のような）ものといえそうである。

以上から判断するに、『楞伽經』は、一つには〈「楞伽」と呼ばれる土地で説かれた経典〉という、また一つには〈「心」の境界に入るための経典〉という二重の意味合いをもつものととらえておくこともできそうである。また、『楞伽經』によれば、〈「心」の境界〉＝〈法身〉＝〈法界〉とも解釈されるから、『楞伽經』はいわば〈入心経〉あるいは〈入法界経〉ととらえておくことも可能であろう。

#### 4. 『楞伽經』の内容の要点

『楞伽經』は、要するに次の点を説く経典らしい。

①すべてのもの（すなわち一切の諸法）は、生じるものでも滅するものでもない（すなわち

<sup>18</sup> 水谷真成（訳）『大唐西域記』中国古典文学大系第 22 卷（平凡社、1971 年）、337 頁、346-347 頁。

<sup>19</sup> たとえば、次は、説処はインドとする。雷徳侯「崗山：佛陀説法之山」（『中国美術学院学報・双月刊』30-1、2009 年）、11-17 頁、11 頁。次は、スリランカとする。高崎直道・堀内俊郎（校註）『楞伽經（楞伽阿跋多羅宝経）』、2015 年、36-37 頁。

<sup>20</sup> 正確なところは、次を参照。鈴木大拙「楞伽經」、2000 年、471 頁。

不生不滅なる)ものである。

②すべてのものは、有なるものでも無なるものでもない(すなわち空なる、①とあわせれば、常に空なる、いわば常にある種の現象たる)ものである。

③すべてのものが①ならびに②の如くであるのは、それらは、心によって発現される(された)ものに過ぎないからである。

④それで、この点を理解し、物事について分別(区別)をしないようにすれば、悟りが得られる。

◆大凡ながら、以上をしめす内容として、たとえば、次があげられよう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(巻4)一切佛語心品之四 T16,507b「佛告大慧。我說。不生不滅。不同外道。不生不滅。所以者何。彼諸外道。有性自性。得不生不變相。我不如是。墮有無品。大慧。①②我者。離有無品。離生滅。非性非無性。如種種幻夢現。故非無性。云何無性。謂色無自性攝受。現不現故。攝不攝故。以是故。②一切性無性非無性。③但覺自心現量。④妄想不生。安隱快樂。世事永息。愚癡凡夫。妄想作事。非諸賢聖。(新国訳 172)」

◇『入楞伽經』(巻6)法身品第七 T16,552b「佛告大慧言。大慧。我所說法。不生不滅者。不同外道。不生不滅。亦不同彼。不生無常法。何以故。大慧。諸外道說。有實有體性。不生不變相。我不如是。墮於有無。朋黨聚中。大慧。①②我說。離有無法。離生住滅相。非有非無。見諸一切。種種色像。如幻如夢。是故不得。言其有無。大慧。云何不得。言其是無。謂色體相。有見不見。取不取故。大慧。是故我說。②一切諸法。非有非無。大慧。③④以不覺知。唯是自心。分別生見。一切世間。諸法本來。不生不滅。而諸凡夫。生於分別。非聖人耶。(一切 128)」

◇『大乘入楞伽經』(巻5)無常品第三之餘 T16,616b-c「佛言。大慧。我之所說。不生不滅。不同外道。不生不滅。不生無常論。何以故。外道所說。有實性相。不生不變。我不如是。墮有無品。①②我所說法。非有非無。離生離滅。云何非無。如幻夢色。種種見故。云何非有。色相自性。非是有故。見不見故。取不取故。是故我說。②一切諸法。非有非無。③若覺惟是。自心所見。④住於自性。分別不生。世間所作。悉皆永息。分別者。是凡愚事。非賢聖耳。(国訳 156-157)」

◆また、次によれば、心は、有なるものでも無なるものでもなく、藏識(すなわち心)は常なるものとされる。したがって、心そのものも、常に空なる、いわば常にある種の現象たるものということになる。なお、「心」=「阿頼耶識」=「藏識」については後述する。

◇『入楞伽經』(巻9)總品第十八之一 T16,572a「見他何過失。諸眾生見外。心非有非無。由熏習不顯。(一切 202)」

◇『大乘入楞伽經』(巻6)偈頌品第十之初 T16,630a「身資土影像。眾生習所現。心非是有無。習氣令不顯。(国訳 226)」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(巻1)一切佛語心品第一 T16,484b「譬如巨海浪。斯由猛風起。洪波鼓冥壑。無有斷絕時。藏識海常住。境界風所動。種種諸識浪。騰躍而轉生。(新国訳 24)」

◇『入楞伽經』(巻2)集一切佛法品第三之一 T16,523b「譬如巨海浪。斯由猛風起。洪波鼓冥壑。無有斷絕時。梨耶識亦爾。境界風吹動。種種諸識浪。騰躍而轉生。(一切 32-33)」

◇『大乘入楞伽經』(巻2)集一切法品第二之二 T16,594c「譬如巨海浪。斯由猛風起。洪波鼓冥壑。無有斷絕時。藏識海常住。境界風所動。種種諸識浪。騰躍而轉生。(国訳 41)」

◆また、心によって発現されるものは無生(したがって不生不滅)なるものとされることは、

次によってもしられる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,507c 「遠離諸因緣。亦離一切事。惟有微心住。想所想俱離。其身隨轉變。我說是無生。(新国訳 175)」

◇『入楞伽經』(卷 6) 法身品第七 T16,553a 「離諸因緣法。為遮諸因緣。說建立惟心。我說名無生。諸法無因緣。離分別分別。離有無朋黨。我說名無生。(一切 130-131)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 無常品第三之餘 T16,617a 「遠離諸因緣。無有能作者。惟心所建立。我說是無生。諸法非因生。非無亦非有。能所分別離。我說是無生。(国訳 160)」

◆また、次は、菩薩の願いに関わる内容ながら、分別をしなければ、悟りが得られることを説くものである。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 1) 一切佛語心品第一 T16,488b-c 「爾時。大慧。菩薩摩訶薩。復請佛言。唯願世尊。為我等説。一切法空。無生。無二。離自性相。我等及餘。諸菩薩眾。覺悟是空。無生。無二。離自性相已。離有無妄想。疾得阿耨多羅三藐三菩提。(新国訳 50)」

◇『入楞伽經』(卷 3) 集一切佛法品第三之二 T16,528c 「爾時聖者。大慧菩薩。復請佛言。惟願世尊。為我等説。一切法空。無生。無二。離自體相。我及一切。諸菩薩眾。知諸法空。無生無二。離自體相已。離有無妄想。速得阿耨多羅三藐三菩提。(一切 49)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 2) 集一切佛法品第二之二 T16,598c 「爾時大慧。菩薩摩訶薩。復請佛言。願為我説。一切法空。無生。無二。無自性相。我及諸菩薩。悟此相故。離有無分別。疾得阿耨多羅三藐三菩提。(国訳 62)」

◆また、『楞伽經』の内容の要点をしめすものとして、すでに次の内容が指摘されている<sup>21)</sup>。それによれば、「五法」(すなわち名、相、分別、正智、如如)と、「三自性」(すなわち妄計自性、縁起自性、円成自性)と、「八種識」(すなわち第八識である阿頼耶識、第七識である末那識、その他の六識である意識、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識)と、「二無我」(すなわち法無我と人無我)を理解すべきとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,511b 「五法三自性。及與八種識。二種無有我。悉攝摩訶衍。名相虛妄想。自性二種相。正智及如如。是則為成相。(新国訳 201)」

◇『入楞伽經』(卷 7) 五法門品第十二 T16,558a 「五法自體相。及與八種識。二種無我法。攝取諸大乘。名相及分別。三法自體相。正智及真如。是第一義相。(一切 149)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 剎那品第六 T16,620c 「五法三自性。及與八種識。二種無我法。普攝於大乘。名相及分別。二種自性攝。正智與如如。是則圓成相。(国訳 180)」

◆以上の「二無我」については、筆者は思うに、後述するように、『楞伽經』は、無我を説く經典ではなく、有我を説く經典である。したがって、「二無我」とは、ブツダの次元においては、人も法もどちらも有我(ただし、人我と法我が個別に住するのではなく、両者は同じもの)であるが、衆生の次元においては、どちらも無我とするものであろう<sup>22)</sup>。なお、次は、

<sup>21)</sup> 小野玄妙(編)『佛書解説大辞典』第11巻、1967年、254頁。

<sup>22)</sup> たとえば、次は、衆生の次元においては無我とされる理由をしめすものであろう。『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 1) 一切佛語心品第一 T16,487c 「謂。離我我所。陰。界。入聚。(新国訳 45)」『入楞伽經』(卷 3) 集一切佛法品第三之二 T16,527c 「謂。離我我所。陰。界。入聚故。(一切 48)」『大乘入楞伽經』(卷 2) 集一切佛法品第二之二 T16,598a 「謂。蘊。界。處。離我我所。(国訳 58)」

心境界（いわば衆生の次元）と聖境界（いわばブツダの次元）とは違いがあることをしめすものである。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 2）一切佛語心品之三 T16,499b 「有無是二邊。乃至心境界。淨除彼境界。平等心寂滅。無取境界性。滅非無所有。有事悉如如。如賢聖境界。（新国訳 124）」

◇『入楞伽經』（卷 5）佛心品第四 T16,542b 「有無是二邊。以為心境界。離諸境界法。平等心寂靜。無取境界法。滅非有非無。如真如本有。彼是聖境界。（一切 95）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 4）無常品第三之一 T16,609a 「有無是二邊。乃至心所行。淨除彼所行。平等心寂滅。不取於境界。非滅無所有。有真如妙物。如諸聖所行。（国訳 115-116）」

## 5. 『楞伽經』が説く：〈①（広義の）「法身」〉＝〈②「真我」〉＋〈③「心」が（広義の）「法身」に変化したもの〉

ここでは、以上の式が導かれる理由を述べる。『楞伽經』は、要するに、〈《すべてのものは、心（すなわち阿頼耶識）の変化によって発現される空なるものである》ことを理解すれば、悟れる〉と説く經典のようである。そして、（広義の）法身（すなわち如来蔵）も、我なるものではなく、空なるものと説くものらしい。一方、絶対的に有なるものとして、「真我」（すなわち「真如」の「我」）を説く点は、『楞伽經』の大きな特徴といえそうである<sup>23</sup>。

### 5-1. 「心」＝「阿頼耶識」＝「蔵識」である

◆先ず、次は、「心」＝「阿頼耶識（阿梨耶識）」＝「蔵識（本識）」であることをしめすものである。なお、唐訳によれば、「心」とは厳密には阿頼耶識（すなわち蔵識）の仮りの名称とされるが、小稿ではとりあえず以上の立場で分析をおこなう。というのは、『楞伽經』においては、総じて三者は同じものにとらえておいて大きな問題はなさそうであるし、また、そうとらえておいた方が理解しやすそうに思われるからである。

◇『入楞伽經』（卷 9）總品第十八之一 T16,566c 「阿梨耶本識。意及於意識。離可取能取。我說如是相。（一切 178）」

◇『入楞伽經』（卷 9）總品第十八之一 T16,567c 「本識但是心。意能念境界。能取諸境界。故我說惟心。（一切 183）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 6）偈頌品第十之初 T16,626a 「顯示阿頼耶。殊勝之蔵識。離於能所取。我說為真如。（国訳 208）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 6）偈頌品第十之初 T16,626c 「蔵識說名心。思量以為意。能了諸境界。是則名為識。（国訳 212）」

### 5-2. 「心」は、すべてのものを発現する（させる）

◆次によれば、すべてのものは、唯だ自らの心（すなわち阿頼耶識）によって発現されるものとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 3）一切佛語心品之三 T16,500a 「佛告大慧。非妄想一生一不生。

<sup>23</sup> 『楞伽經』における「真我」についての次による指摘は、重要であろう。山上曹源「大乘入楞伽經解題」、1927年、解題 20-23 頁。

所以者何謂。有無妄想不生故。外現性非性。覺自心現量。妄想不生。(新国訳 128)」

◇『入楞伽經』(卷 5) 佛心品第四 T16,543a「佛告大慧。我分別虛妄。不生不滅。何以故。不生有無。分別相故。不見一切。外有無故。大慧。以見自心。如實見故。虛妄分別。不生不滅。(一切 98)」

◇『入楞伽經』(卷 9) 總品第十八之一 T16,570b「自心所見法。外法無外法。如是觀迷惑。常憶念真如。(一切 195)」

◇『入楞伽經』(卷 10) 總品第十八之二 T16,577a「無外諸色相。自心見外法。覺知於自心。愚分別有為。(一切 223)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 4) 無常品第三之一 T16,609b「佛言。大慧。分別不生不滅。何以故。不起有無分別相故。所見外法。皆無有故。了唯自心之所現故。(国訳 119)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 6) 偈頌品第十之初 T16,628b「所見唯自心。外境不可得。若修如是觀。捨妄念真如。(国訳 220)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 7) 偈頌品第十之二 T16,632c「外實無有色。惟自心所現。愚夫不覺知。妄分別有為。(国訳 240)」

### 5-3. 「真如」も「涅槃」も、「心」によって発現される

◆次によれば、真如も涅槃も法界も種々の意成身(いわば広義の法身)も、心によって発現されるものとされる。したがって、真如も涅槃も、不生不滅なるもので、空なるものということになる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 3) 一切佛語心品之三 T16,500b「如如與空際。涅槃及法界。種種意生身。我說為心量。(新国訳 130)」

◇『入楞伽經』(卷 5) 佛心品第四 T16,543c「真如。空。實際。涅槃。及法界。意身。身心等。故我說唯心。分別依熏縛。心依諸境生。眾生見外境。故我說唯心。(一切 99-100)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 4) 無常品第三之一 T16,610a「真如。空。實際。涅槃。及法界。種種意成身。我說是心量。妄想習氣縛。種種從心生。眾生見為外。我說是心量。外所見非有。而心種種現。身資及所住。我說是心量。(国訳 121)」

### 5-4. 「真如」も「涅槃」も、「心」が変化したものである

◆次によれば、心は、転依(要するに変化)して、真如になるとされる。

◇『入楞伽經』(卷 9) 總品第十八之一 T16,574a「實知可見心。時知分別生。不生諸分別。是真如離心。(一切 210)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 7) 偈頌品第十之二 T16,631b「了知心所現。分別即不起。分別不起故。真如心轉依。(国訳 233)」

◆次によれば、心は、転依して、大涅槃になるとされる。また、心(すなわち阿頼耶識すなわち蔵識)の変化は、自覚聖智にもとづく(自覚聖智からの)変化ともいえそうである。したがって、〈自覚聖智(自証聖智)〉=〈「心」(正確には変化する前の初期状態の「心」あるいはその成分のようなもの)〉ととらえておいてよさそうである。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 1) T16,486c「諸聲聞。畏生死妄想苦。而求涅槃。不知生死。涅槃差別。一切性妄想非性。未來諸根。境界休息。作涅槃想。非自覺聖智趣藏識轉。是故。凡愚說有三乘。說心量趣無所有。(新国訳 38)」

◇『入楞伽經』(卷2)集一切佛法品第三之一 T16,526「諸聲聞辟支佛。畏生死妄想苦。而求涅槃。不知世間涅槃。無差別故。分別一切法與非法。而滅諸根。不取未來。境界妄取。以為涅槃。不知內身證修行法故。不知阿梨耶識轉故。大慧。是故彼愚癡人。說有三乘法。而不能知。唯心想寂滅。得寂滅法。(一切 42-43)」

◇『大乘入楞伽經』(卷2)集一切佛法品第二之二 T16,597a「諸聲聞。畏生死妄想苦。而求涅槃。不知生死涅槃差別之相。一切皆是。妄分別有。無所有故。妄計未來。諸根境滅。以為涅槃。不知證自智境界。轉所依藏識。為大涅槃。彼愚癡人。說有三乘。不說唯心。無有境界。(国訳 53)」

### 5-5. 「真如」 = 「涅槃」 = 「(広義の) 法身」 = 「如来蔵」である

◆次によれば、「真如」 = 「涅槃」 = 「(広義の) 法身」 = 「意成身」 = 「意生身」 = 「意生法身」で、それは「見えない」もの(「無相」)で、空なるもの(「性空」あるいは「空」とされる。なお、次の内容とその前後は、『楞伽經』において、(広義の) 法身の特徴が、異名を並べることをもって、最も詳しく説かれるところである。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷4)一切佛語心品之四 T16,506a-b「我説如來。非無性。亦非不生不滅。攝一切法。亦不待緣故。不生不滅。亦非無義。大慧。我説。意生法身。如來名號。彼不生者。一切外道。聲聞。緣覺。七住菩薩。非其境界。大慧。彼不生即如來異名。...有知無生者。有知無滅者。有知空者。有知如如者。有知諦者。有知實際者。有知法性者。有知涅槃者。有知常者。有知平等者。有知不二者。有知無相者。有知解脫者。有知道者。有知意生者。(新国訳 165-166)」

◇『入楞伽經』(卷6)法身品第七 T16,551a-b「如來法身。非是無物。亦非一切法。不生不滅。亦不得言。依因緣有。亦非虛妄説。不生不滅。大慧。我常説言。不生不滅者。名意生身。如來法身。非諸外道聲聞辟支佛境界故。住七地菩薩。亦非境界。大慧。我言。不生不滅者。即如來異名。...有知不生者。有知不滅者。有知空者。有知真如者。有知實際者。有知涅槃者。有知法界者。有知法性者。有知常者。有知平等者。有知不二者。有知無相者。有知緣者。有知佛體者。有知因者。有知解脫者。有知道者。有知實諦者。有知一切智者。有知意生身者。(一切 124-125)」

◇『大乘入楞伽經』(卷5)無常品第三之餘 T16,615b-c「我説。如來非是無法。亦非攝取。不生不滅。亦不待緣。亦非無義。我説無生。即是如來。意生法身。別異之名。一切外道。聲聞。獨覺。七地菩薩。不了其義。...知無滅者。知無生者。知性空者。知真如者。知是諦者。知實性者。知實際者。知法界者。知涅槃者。知常住者。知平等者。知無二者。知無相者。知寂滅者。知具相者。知因緣者。知佛性者。知教導者。知解脫者。知道路者。知一切智者。知最勝者。知意成身者。(国訳 150-152)」

◆次によれば、「涅槃」 = 「如来蔵」であるから、先とあわせれば、「真如」 = 「涅槃」 = 「(広義の) 法身」 = 「如来蔵」となる。したがって、『楞伽經』においては、「如来蔵」 = 「仏性」であることになりそうである。一方、『涅槃經』においては、「如来蔵」 ≠ 「仏性」であるらしい<sup>24</sup>。

<sup>24</sup> 別稿「『大乘涅槃經』が説く」『参考資料集』、14-15頁を参照。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 2）一切佛語心品之二 T16,489b「佛告大慧。我説如來藏。不同外道所説之我。大慧。有時説空。無相。無願。如。實際。法性。法身。涅槃。離自性。不生不滅。本來寂靜。自性涅槃。如是等句。説如來藏已。（新国訳 55）」

◇『入楞伽經』（卷 3）集一切佛法品第三之二 T16,529b「佛告聖者大慧菩薩言。大慧。我説如來藏常。不同外道。所有神我。大慧。我説如來藏。空。實際。涅槃。不生不滅。無相。無願等文辭章句。説名如來藏。（一切 53）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 2）集一切法品第二之二 T16,599b「佛言。大慧。我説如來藏。不同外道。所説之我。大慧。如來應正等覺。以性空。實際。涅槃。不生。無相。無願等諸句義。説如來藏。（国訳 65）」

## 5-6.したがって、「（広義の）法身」（すなわち「如来蔵」）も、「心」が変化したものである

◆次によれば、声聞と縁覚の者にとっては、（広義の）法身（すなわち如来蔵）も心（すなわち阿頼耶識）も、起こる（生じる）ものとされるから、変化するもの（したがって無我なるもので、空なるもの）ということになる。一方、『楞伽經』が説こうとしているところは、大乘の者にとっては、法身も心も、実は生滅がある空なるものではなく、不生不滅なる、空なる（したがって、常に空なる、いわば常にある種の現象たる）ものということであろう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 4）一切佛語心品之四 T16,510c「我於此義。以神力建立。令勝鬘夫人。及利智滿足。諸菩薩等。宣揚演説。如來蔵及識蔵名。與七識俱生。聲聞計著。見人法無我。故勝鬘夫人。承佛威神。説如來境界。非聲聞縁覚。及外道境界。（新国訳 194）」

◇『入楞伽經』（卷 7）佛性品第十一 T16,557a「我依此義。依勝鬘夫人。依餘菩薩摩訶薩。深智慧者。説如來蔵。阿梨耶識。共七種識生。名轉滅相。為諸聲聞。辟支佛等。示法無我。對勝鬘。説言如來蔵。是如來境界。（一切 145）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 5）刹那品第六 T16,620a「我為勝鬘夫人。及餘深妙。淨智菩薩。説如來蔵名蔵識。與七識俱起。令諸聲聞。見法無我。大慧。為勝鬘夫人。説佛境界。非是外道。二乘境界。（国訳 175-176）」

◆なお、次によれば、如来蔵は生滅するものともとらえられるかもしれない。しかしながら、先述したところによれば、心によって発現されるものは不生不滅なるものとされる。したがって、次は、如来蔵は生滅するものとするのは、凡愚の解釈と説くものであろう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 4）一切佛語心品之四 T16,512b「如來蔵者。受苦樂與因俱。若生若滅。四住地。無明住地所醉。凡愚不覺。刹那見妄想動心。（新国訳 206）」

◇『入楞伽經』（卷 8）刹那品第十四 T16,559c「如來蔵。不受苦樂。非生死因。餘法者。共生共滅。依於四種。熏習醉故。而諸凡夫。不覺不知。邪見熏習。言一切法。刹那不住。（一切 154）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 5）刹那品第六 T16,621c「如來蔵受苦樂。與因俱有生滅。四種習氣之所迷覆。而諸凡愚。分別熏心。不能了知。起刹那見。（国訳 184-185）」

## 5-7. 「（広義の）法身」は「心」である

◆次によれば、心（すなわち阿頼耶識すなわち蔵識）は、他の七識にとっての根本（本体）たるものとして、（広義の）法身（すなわち如来蔵）の中に住するとされる<sup>25</sup>。したがって、厳密にはく（広義の）「法身」（すなわち「如来蔵」）≠く「心」（すなわち「阿頼耶識」）であることになる。この点には、注意が払われるべきであろう<sup>26</sup>。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（巻4）一切佛語心品之四 T16,510b「不離不轉。名如來藏。識藏。七識流轉不滅。（新国訳 193-194）」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（巻4）一切佛語心品之四 T16,510b「菩薩摩訶薩。欲求勝進者。當淨如來藏。及藏識名。（新国訳 194）」

◇『入楞伽經』（巻7）佛性品第十一 T16,556c「如來藏識。不在阿梨耶識中。是故七種識。有生有滅。如來藏識。不生不滅。（一切 144）」

◇『入楞伽經』（巻7）佛性品第十一 T16,556c「諸菩薩摩訶薩。欲證勝法。如來藏。阿梨耶識者。應當修行。令清淨故。（一切 144）」

◇『大乘入楞伽經』（巻5）剎那品第六 T16,619c「而實未捨未轉。如來藏中。藏識之名。若無藏識。七識則滅。（国訳 175）」

◇『大乘入楞伽經』（巻5）剎那品第六 T16,619c「菩薩摩訶薩。欲得勝法。應淨如來藏。藏識之名。（国訳 175）」

◆心（すなわち阿頼耶識すなわち蔵識）が、他の七識にとって根本（本体）たるものとして、いわば総体をなすものであることは、次からもしられよう。なお、以上と次によれば、七識は生滅するものとされる。これは、七識が何らかの因縁により、（常に空なる、いわば常にある種の現象たる）心（正確にはその初期状態にあるもの）の中に、一時的に発現される（いわば不純物のような）空なるものであることを意味するものであろう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（巻1）一切佛語心品第一 T16,484b「譬如巨海浪。斯由猛風起。洪波鼓冥壑。無有斷絕時。藏識海常住。境界風所動。種種諸識浪。騰躍而轉生。（新国訳 24）」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（巻1）一切佛語心品第一 T16,484c「爾時。大慧菩薩。復說偈言。大海波浪性。鼓躍可分別。藏與業如是。何故不覺知。爾時。世尊以偈答曰。凡夫無智慧。藏識如巨海。業相猶波浪。依彼譬類通。（新国訳 25）」

◇『入楞伽經』（巻2）集一切佛法品第三之一 T16,523b「譬如巨海浪。斯由猛風起。洪波鼓冥壑。無有斷絕時。梨耶識亦爾。境界風吹動。種種諸識浪。騰躍而轉生。（一切 32-33）」

◇『入楞伽經』（巻2）集一切佛法品第三之一 T16,523c「大海波浪動。鼓躍可分別。阿梨耶識轉。何故不覺知。凡夫無智慧。梨耶識如海。波浪轉對法。是故譬喻說。（一切 34）」

◇『大乘入楞伽經』（巻2）集一切法品第二之二 T16,594c「譬如巨海浪。斯由猛風起。洪波鼓冥壑。無有斷絕時。藏識海常住。境界風所動。種種諸識浪。騰躍而轉生。（国訳 41）」

---

<sup>25</sup> なお、梵本によれば、異なる解釈が可能らしい。次を参照。高崎直道・堀内俊郎（校註）『楞伽經（楞伽阿跋多羅寶經）』、2015年、193-195頁。しかしながら、筆者は思うに、以上によれば、「如来蔵という呼び名で呼ばれるアーヤ識」という表現にもとづき「アーヤ識」＝「如来蔵」とされるようであるが、必ずしも常に「アーヤ識」＝「如来蔵」というわけではなく、アーヤ識は我所に、如来蔵は我我所に相当するものである可能性もあるのではなかろうか。要検討。

<sup>26</sup> たとえば、次でも、如来蔵と阿頼耶識は同義ととらえられている。常盤大定「入楞伽經解題」、1936年、62-70頁、68頁。

◇『大乘入楞伽經』（卷 2）集一切法品第二之二 T16,595a「爾時大慧。復說頌言。大海波浪性。鼓躍可分別。藏識如是起。何故不覺知。爾時世尊。以頌答曰。阿賴耶如海。轉識同波浪。為凡夫無智。譬喻廣開演。（国訳 42-43）」

### 5-8. 「（広義の）法身」は「真我」である

◆次によれば、（広義の）法身（すなわち如来藏）は、「真我」の「相（いわば発現されている状態）」をしめすものとされる<sup>27</sup>。したがって、（広義の）法身を発現させる根本たるものは、「真我」ということになる。

◇『入楞伽經』（卷 10）總品第十八之二 T16,583a「内身修實行。我是清淨相。如來藏佛境。妄覺非境界。（一切 250）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 7）偈頌品第十之二 T16,637b「内證智所行。清淨真我相。此即如來藏。非外道所知。（国訳 264）」

### 5-9. 「真我」（すなわち「真如」の「我」）は、絶対的に有なるものである

◆次によれば、「真我」は、五蘊（五陰、いわば衆生が認識できるもの）の中に住し、五蘊を発現させる根本たるもので、実有なる（すなわち絶対的に有なる）ものとされる。

◇『入楞伽經』（卷 10）總品第十八之二 T16,583b「如琴及鼗鼓。種種美妙聲。陰中我亦爾。愚癡覓一異。地中諸寶藏。及與清淨水。陰中我亦爾。實有不可見。心及心數法。功德陰和合。陰中我亦爾。無智不能見。如女人胎藏。雖有而不見。我於五陰中。無智故不見。如香藥重擔。火及於諸薪。陰中我亦爾。無智不能見。一切諸法中。無常及與空。陰中我亦爾。無智有不見。諸地及自在。通及於受位。無上妙諸法。及餘諸三昧。及諸勝境界。若陰中無我。而此諸法等。一切亦應無。有人破壞言。若有應示我。智者應答言。汝心應示我。說無真如我。惟是虛妄說。作比丘業者。不應共和合。（一切 251-252）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 7）偈頌品第十之二 T16,637c-638a「無智者推求。箜篌蠡鼓等。而覓妙音聲。蘊中我亦爾。猶如伏藏寶。亦如地下水。雖有不可見。蘊真我亦然。心心所功能。聚集蘊相應。無智不能取。蘊中我亦爾。如女懷胎藏。雖有不可見。蘊中真實我。無智不能知。如藥中勝力。亦如木中火。蘊中真實我。無智不能知。諸法中空性。及以無常性。蘊中真實我。無智不能知。諸地自在通。灌頂勝三昧。若無此真我。是等悉皆無。有人破壞言。若有應示我。智者應答言。汝分別示我。說無真我者。謗法著有無。比丘應羯磨。擯棄不共語。（国訳 265-266）」

◆次も、「真我」が、空なるものではなく、絶対的に有なるものであることをしめすものであろう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 2）一切佛語心品之三 T16,499b「有無是二邊。乃至心境界。淨除彼境界。平等心寂滅。無取境界性。滅非無所有。有事悉如如。如賢聖境界。（新国訳 124）」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 3）一切佛語心品之三 T16,500c「陰中無有我。陰非即是我。不如彼妄想。亦復非無我。（新国訳 132）」

<sup>27</sup> 漢訳では「相」とされるが、梵本と比較するに、あるいは「性」と訳されてもよいのではなかろうか。要検討。Daisetz Teitaro Suzuki: *The Lankavatara Sutra*, 10.746 を参照。

- ◇『入楞伽經』（卷 5）佛心品第四 T16,542b 「有無是二邊。以為心境界。離諸境界法。平等心寂靜。無取境界法。滅非有非無。如真如本有。彼是聖境界。（一切 95）」
- ◇『入楞伽經』（卷 5）佛心品第四 T16,544a 「五陰中無我。我中無五陰。不如彼妄相。亦復非是無。（一切 101）」
- ◇『大乘入楞伽經』（卷 4）無常品第三之一 T16,609a 「有無是二邊。乃至心所行。淨除彼所行。平等心寂滅。不取於境界。非滅無所有。有真如妙物。如諸聖所行。（国訳 115-116）」
- ◇『大乘入楞伽經』（卷 4）無常品第三之一 T16,610a-b 「蘊中無有我。非蘊即是我。不如彼分別。亦復非無有。（国訳 122）」

### 5-10.ただし、衆生の次元においては、「真我」=0である

◆次によれば、衆生（すなわち無智の者）にとっては、真我は認識できないものであるから、衆生の次元においては、「真我」=0であることになる。この点は、「真我」が道家系の「常道」に近似するものであることをしめすものといえよう。

◇『入楞伽經』（卷 10）總品第十八之二 T16,583b 「如琴及舂鼓。種種美妙聲。陰中我亦爾。愚癡覓一異。地中諸寶藏。及與清淨水。陰中我亦爾。實有不可見。心及心數法。功德陰和合。陰中我亦爾。無智不能見。如女人胎藏。雖有而不見。我於五陰中。無智故不見。如香藥重擔。火及於諸薪。陰中我亦爾。無智不能見。一切諸法中。無常及與空。陰中我亦爾。無智有不見。諸地及自在。通及於受位。無上妙諸法。及餘諸三昧。及諸勝境界。若陰中無我。而此諸法等。一切亦應無。有人破壞言。若有應示我。智者應答言。汝心應示我。說無真如我。惟是虛妄說。作比丘業者。不應共和合。（一切 251-252）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 7）偈頌品第十之二 T16,637c-638a 「無智者推求。箜篌蠡鼓等。而覓妙音聲。蘊中我亦爾。猶如伏藏寶。亦如地下水。雖有不可見。蘊真我亦然。心心所功能。聚集蘊相應。無智不能取。蘊中我亦爾。如女懷胎藏。雖有不可見。蘊中真實我。無智不能知。如藥中勝力。亦如木中火。蘊中真實我。無智不能知。諸法中空性。及以無常性。蘊中真實我。無智不能知。諸地自在通。灌頂勝三昧。若無此真我。是等悉皆無。有人破壞言。若有應示我。智者應答言。汝分別示我。說無真我者。謗法著有無。比丘應羯磨。擯棄不共語。（国訳 265-266）」

5-11.一方、「真我」は、絶対的に有なるものであるが、先述したところによれば、「心」は、常に空なるものとされる。したがって、「真我」≠「心」であることになる

### 5-12.「心」は、体をもつ。この体こそ「真我」であろう

◆次は、心が体（すなわち根本たるもの、換言すれば我）をもつものであることをしめす。そうであれば、この体に相当するものこそ真我で、一方、心（ひいては心が変化したもの）とは、我としての真我によって発現される（された）我所に相当するものということになる。

◇『入楞伽經』（卷 9）總品第十八之一 T16,570b 「心體自清淨。意起共諸濁。意及一切識。能作熏種子。（一切 195）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 6）偈頌品第十之初 T16,628b 「心體自本淨。意及諸識俱。習氣常熏故。而作諸濁亂。（国訳 220）」

◆なお、正確には、(初期状態の)心は真我によって発自される(された)もので、心が変化したものは真我によって発他される(された)ものともいえよう。また、先述したところを参考にすれば、心は常なるものであるから、無始無終なる(すなわち始めから永遠に存在する)ものということになる。

### 5-13.したがって、以上が認められれば、次の式が成り立とう

〈①(広義の)「法身」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③「心」が(広義の)「法身」に変化したもの〉

〈①「我我所」〉 = 〈②「我」〉 + 〈③「我所」〉

なお、以上の二式は、それぞれ対応するもので、「我我所」とは「我」と「我所」をあわせたもの、「我」とは根本たるもの、「我所」とは「我」によって発現される(された)ものを意味する。また、先述したとおり、〈「心」は、すべてのものを発現する(させる)〉とされるから、次の一般式も成り立とう。

〈①「X」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③「心」が「X」に変化したもの〉

### 6.『楞伽經』が説く：〈①究極の「法身」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③初期状態の「心」〉

ここでは、以上の式が導かれる理由を述べる。なお、『楞伽經』には詳しい説明がないため、要検討ながら、〈初期状態の「心」〉 = 〈第九識〉ととらえておくこともできよう<sup>28)</sup>。

#### 6-1.「(究極の)法身」は、真実如来である

◆次によれば、法仏は、化仏の根本たるもので、真仏とされる。これは、(究極の)法身(すなわち法身のブツダ)がいわゆる真のブツダ(すなわち真実如来)であることをしめすものである<sup>29)</sup>。

◇『入楞伽經』(巻9)總品第十八之一 T16,574b「彼法無種種。法佛世間爾。法佛是真佛。餘者依彼化。眾生自種子。見一切佛相。依迷惑轉心。能生於分別。(一切212)」

◇『大乘入楞伽經』(巻7)偈頌品第十之二 T16,631c「法佛於世間。猶如妄計性。雖見有種種。而實無所有。法佛是真佛。餘皆是化佛。隨眾生種子。見佛所現身。(国訳234)」

#### 6-2.「(究極の)法身」は、清浄なるものである

◆次によれば、(究極の)法身(すなわち真実如来)は、清浄なるものとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(巻4) T16,511c「自建立自通者。過世間望。彼諸凡愚。所不能信。自覺聖智境界。無以為譬。真實如來。過心意意識。所見之相。不可為譬。大慧。然我説譬。佛如恒沙。無有過咎。大慧。譬如恒沙。一切魚鼈。輪牧魔羅。師子象馬。人獸踐踏。沙不念言。彼惱亂我。而生妄想。自性清浄。無諸垢汚。(新国訳202)」

<sup>28)</sup> 第九識については、次を参照。中村元『佛教語大辞典』上巻(東京書籍、1975年)、254頁、「九識」。

<sup>29)</sup> 『楞伽經』においては、「法仏」は「法身」ととらえてよさそうである。「仏」 = 「身」については、次を参照。王俊洪『Prasannapadā 第25章の研究』(東京大学博士(文学)甲第34532号、2018年)、97-103頁。

◇『入楞伽經』（卷 7）T16,558b「我依內身。證法說法。是故說過。世間譬喻。以諸凡夫。無信眾生。不能信我。所說譬喻。何以故。說自內身。聖智境界。無譬喻可說。遠離心意意識。過諸見地。諸佛如來。真如之法。不可說故。是故我說。種種譬喻。大慧。我說諸佛。如恒河河沙者。是少分譬喻。大慧。諸佛如來。平等非不平等。以非分別分別故。大慧。譬如恒河河中。所有之沙。魚鼈龜龍。牛羊象馬。諸獸踐踏。而彼河沙。不生分別。不瞋不恚。亦不生心。彼惱亂我。無分別故。淨離諸垢。（一切 150）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 5）剎那品第六 T16,621a「如是譬喻。非說自法。自法者。內證聖智。所行境界。世間無等。過諸譬喻。一切凡愚。不能信受。大慧。真實如來。超心意意識。所見之相。不可於中。而立譬喻。然亦有時。而為建立。言恒河沙等。無有相違。大慧。譬如恒沙。龜魚象馬。之所踐踏。不生分別。恒淨無垢。（国訳 181）」

◆次によれば、（広義の）法身（すなわち如来藏）は、そもそもは清浄なるものとされる。したがって、究極の法身は、清浄なるものということになる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 2）一切佛語心品之二 T16,489a-b「爾時。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊世尊。修多羅說。如來藏。自性清淨。轉三十二相。入於一切。眾生身中。如大價寶。垢衣所纏。如來之藏。常住不變。亦復如是。而陰界入。垢衣所纏。貪欲恚癡。不實妄想。塵勞所污。一切諸佛。之所演說。（新国訳 55）」

◇『入楞伽經』（卷 3）集一切佛法品第三之二 T16,529b「爾時聖者。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊世尊。如修多羅說。如來藏。自性清淨。具三十二相。在於一切。眾生身中。為貪瞋癡。不實垢染。陰界入衣。之所纏裹。如無價寶。垢衣所纏。如來世尊。復說常恒。清涼不變。（一切 53）」

◇『入楞伽經』（卷 10）總品第十八之二 T16,583a「內身修實行。我是清淨相。如來藏佛境。妄覺非境界。」

◇『大乘入楞伽經』（卷 2）集一切法品第二之二 T16,599b「爾時。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊。修多羅中。說如來藏。本性清淨。常恒不斷。無有變易。具三十二相。在於一切。眾生身中。為蘊界處。垢衣所纏。貪恚癡等。妄分別垢。之所污染。如無價寶。在垢衣中。（国訳 64）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 7）偈頌品第十之二 T16,637b「內證智所行。清淨真我相。此即如來藏。非外道所知。（国訳 264）」

### 6-3. 一方、「真我」も、清浄なるものである

◆次は、真我（すなわち心の体）が清浄なるものであることを説くものであろう。

◇『入楞伽經』（卷 9）總品第十八之一 T16,570b「心體自清淨。意起共諸濁。意及一切識。能作熏種子。」

◇『大乘入楞伽經』（卷 6）偈頌品第十之初 T16,628b「心體自本淨。意及諸識俱。習氣常熏故。而作諸濁亂。（国訳 220）」

### 6-4. 「心」は、初期状態においては、清浄なるものである

◆次によれば、心（すなわち阿頼耶識すなわち蔵識）は、煩惱に覆われて不浄なるものになるが、本来（すなわち初期状態において）は清浄なるものとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 4）一切佛語心品之四 T16,510b「外道不覺。計著作者。為無始虛

偽。惡習所薰。名為識藏。生無明住地。與七識俱。如海浪身。常生不斷。離無常過。離於我論。自性無垢。畢竟清淨。(新国訳 192)」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,510c 「此如來藏識藏。一切聲聞。緣覺心想所見。雖自性淨。客塵所覆故。猶見不淨。非諸如來。大慧。如來者。現前境界。猶如掌中。視阿摩勒果。(新国訳 194)」

◇『入楞伽經』(卷 7) 佛性品第十一 T16,556b-c 「諸外道等。妄計我故。不能如實。見如來藏。以諸外道。無始世來。虛妄執著。種種戲論。諸熏習故。大慧。阿梨耶識者。名如來藏。而與無明。七識共俱。如大海波。常不斷絕。身俱生故。離無常過。離於我過。自性清淨。(一切 143-144)」

◇『入楞伽經』(卷 7) 佛性品第十一 T16,557a 「此如來心。阿梨耶識。如來藏諸境界。一切聲聞。辟支佛。諸外道等。不能分別。何以故。以如來藏。是清淨相。客塵煩惱。垢染不淨。(一切 145)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 刹那品第六 T16,619c 「外道不知。執為作者。無始虛偽。惡習所熏。名為藏識。生於七識。無明住地。譬如大海。而有波浪。其體相續。恒注不斷。本性清淨。離無常過。離於我論。(国訳 174)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 刹那品第六 T16,619c-620a 「此如來藏藏識。本性清淨。客塵所染。而為不淨。一切二乘。及諸外道。臆度起見。不能現證。如來於此。分明現見。如觀掌中。菴摩勒果。国訳 175)」

## 6-5.したがって、「心」が清淨なる状態(すなわち初期状態)にある時には、次の式が成り立つ

〈①「我我所」〉 = 〈②「我」〉 + 〈③「我所」〉

〈①究極の「法身」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③初期状態の「心」〉

なお、以上の二式は、それぞれ対応するものである。

一方、道家系の道についての理論は、次のように式化できそうである。

〈①(広義の)「道」〉 = 〈②「常道」〉 + 〈③「一なる」もの〉

そうであれば、次のようにとらえておくこともできよう。

〈①究極の「法身」〉 = 〈①道家系の(広義の)「道」〉

〈②「真我」〉 = 〈②道家系の「常道」〉

〈③初期状態の「心」〉 = 〈③道家系の「一なる」もの〉

以上は、『楞伽經』が説くところは、道家系が説くところと近似するものであることをしめすものといえよう。

## 7. 『楞伽經』が説く仏身論

### 7-1. 『金光明經』新本よりもさらに展開したもの

一説によれば、『楞伽經』が説く仏身論においては、「仏」＝「身」らしいとされる<sup>30</sup>。筆者は思うに、そのとおりであろう。解釈を同じくする。したがって、以下ではこの立場で分析をおこなう。

『楞伽經』の仏身論は、「法身」を最も根本的な仏身（あるいはその状態にあるブツダ）とし、先述したように、「真如」＝「涅槃」＝「（広義の）法身」＝「如来蔵」とする点を特徴とする。そして、『金光明經』新本が説くところと大凡同様な三身説（あるいは三身四種説）を説くものである点が注目されそうでもある<sup>31</sup>。ところが、一方、『楞伽經』は、『金光明經』新本とは異なり、以下で確認するように、瑜伽行派が説く受用身に相当するものを明らかに直接的に説いている。この点は、『楞伽經』の仏身論が『金光明經』新本のものよりも展開（あるいは調整）が進んだものであることをしめすものであるから、読み落とされてはならないであろう。また、『金光明經』新本は「真如」≠「法身」とするが、『楞伽經』は「真如」＝「（広義の）法身」と説く。この点は、さらに大きな展開（あるいは調整）があったらしいことを意味するものである。したがって、この点にまつわる内容は、十分に検討されておかれるべきものといえよう。

## 7-2. 『楞伽經』が説く三身説（あるいは三身四種説）

◆『楞伽經』においては、根本的な三身（あるいは三身のいずれかの状態にあるブツダ）すなわち①「法身」（＝「法仏」＝「自性身」＝「法性仏」＝「真如智慧仏」）と、②「報身」（＝「報仏」＝「受用身」＝「依仏」＝「法性所流仏」）と、③「化身」（＝「化仏」＝「応化仏」＝「応仏」＝「変化仏」）が説かれている。さらに、化身によって発現される④「化所現身」（＝「現化身」）があるとされる。したがって、『楞伽經』が説くところは、三身四種説ともいい得るものである。

◆次によれば、①法身と②報身と③化身が根本的な仏身（筆者は思うに、いわば真我が心をもって発現させるもの）であり、さらに③化身が発現させる④化所現身があるとされる。

◇『入楞伽經』（巻 9）總品第十八之一 T16,575c 「說是真法習。所有集作化。是諸佛根本。餘者應化佛。（一切 217）」

◇『大乘入楞伽經』（巻 7）偈頌品第十之二 T16,632b 「依①法身有②報。從②報起③化身。此為根本佛。餘皆④化所現。（国訳 238）」

◆筆者は思うに、以上は、真我が心をもって法身を発自させ、法身にもとづき報身を発他させ、報身にもとづき化身を発他させるということであろう。

◆次によれば、法身のブツダが真（いわば究極の法身）のブツダとされる。

◇『入楞伽經』（巻 9）總品第十八之一 T16,574b 「法佛是真佛。餘者依彼化。眾生自種子。見一切佛相。（一切 212）。」

◇『大乘入楞伽經』（巻 7）偈頌品第十之二 T16,631c 「法佛是真佛。餘皆是化佛。隨眾生種子。見佛所現身。（国訳 234）」

◆次は、①「法身」＝「法仏」、②「報身」＝「報仏」、③「化身」＝「化仏」＝「応化仏」であることをしめすものである。

<sup>30</sup> 次を参照。王俊淇『Prasannapadā 第 25 章の研究』、2018 年、97-103 頁。

<sup>31</sup> 別稿「『金光明經』が説く」を参照。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 1) 一切佛語心品第一 T16,486a 「譬如藏識。頓分別知。自心現。及身安立。受用境界。彼諸依佛。亦復如是。頓熟眾生。所處境界。以修行者。安處於彼。色究竟天。譬如①法佛。②③所作依佛。光明照曜。自覺聖趣。亦復如是。彼於法相。有性無性。惡見妄想。照令除滅。(新国訳 34)」

◇『入楞伽經』(卷 2) 集一切佛法品第三之一 T16,525b 「譬如阿梨耶識。分別現境。自身資生。器世間等。一時而知。非是前後。大慧。報佛如來。亦復如是。一時成熟。諸眾生界。置究竟天。淨妙宮殿。修行清淨之處。大慧。譬如①法佛②報佛。放諸光明。有③應化佛。照諸世間。大慧。內身聖行。光明法體。照除世間。有無邪見。亦復如是。(一切 39)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 2) 集一切法品第二之二 T16,596b 「譬如藏識。頓現於身。及資生國土。一切境界。報佛亦爾。於色究竟天。頓能成熟。一切眾生。令修諸行。譬如①法佛。頓現②報佛。及以③化佛。光明照曜。自證聖境。亦復如是。頓現法相。而為照曜。令離一切。有無惡見。(国訳 50)」

◆以上と次をあわせれば、①「法身」＝「法仏」＝「自性身」、②「報身」＝「報仏」＝「受用身」、③「化身」＝「化仏」があり、さらに④「現化身」があることになる。

◇『入楞伽經』(卷 9) 總品第十八之一 T16,574b 「實體及受樂。化復作諸化。佛眾三十六。是諸佛實體。(一切 212)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 7) 偈頌品第十之二 T16,631c 「①自性及②受用。③化身復④現化。佛德三十六。皆自性所成。(国訳 235)」

◆次は、①「法身」＝「法仏」＝「法性仏」、②「報身」＝「報仏」＝「依仏」＝「法性所流仏」、③「化身」＝「化仏」＝「応化仏」＝「応仏」＝「変化仏」であることをしめすものである。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 1) 一切佛語心品第一 T16,486a-b 「如是。大慧。依緣起自性。起妄想自性。種種妄想心。種種想行。事妄想相。計著習氣妄想。大慧。是為妄想自性相生。大慧。是名②依佛說法。大慧。①法佛者。離心自性相。自覺聖所緣境界。建立施作。大慧。③化佛者。說施。戒。忍。精進。禪定。及心智慧。離陰界入。解脫識相分別。觀察建立。超外道見。無色見。大慧。又①法佛者。離攀緣。所緣離。一切所作。根量相滅。非諸凡夫。聲聞。緣覺。外道。計著我相。所著境界。自覺聖究竟。差別相建立。是故。大慧。自覺聖差別相。當勤修學。自心現見。應當除滅。(新国訳 34-35)」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,513a 「③化佛授聲聞記。非是①法佛。(新国訳 210)」

◇『入楞伽經』(卷 2) 集一切佛法品第三之一 T16,525b-c 「大慧。因緣法體。隨心分別。亦復如是。以見心相。種種幻故。何以故。以執著虛妄相。因分別心熏習故。大慧。是名分別虛妄體相。大慧。是名②報佛說法之相。大慧。①法佛說法者。離心相應體故。內證聖行境界故。大慧。是名法佛說法之相。大慧。③應化佛所作。應佛說施。戒。忍。精進。禪定。智慧故。陰界。入。解脫故。建立識想。差別行故。說諸外道無色。三摩跋提次第相。大慧。是名應佛所作。③應佛說法相。復次。大慧。①法佛說法者。離攀緣故。離能觀所觀故。離所作相量相故。大慧。非諸凡夫。聲聞緣覺。外道境界故。以諸外道。執著虛妄我相故。是故。大慧。如是內身自覺。修行勝相。當如是學。大慧。汝當應離。見自心相。以為非實。(一切 40)」

◇『入楞伽經』(卷 8) 化品第十五 T16,560c 「③應化佛為應化聲聞授記。非②報佛①法身佛。而授記。 (一切 157)」

◇『大乘入楞伽經』(卷2)集一切法品第二之二 T16,596b-c「大慧。此亦如是。由取著境界。習氣力故。於緣起性中。有妄計性。種種相現。是名妄計性生。大慧。是名②法性所流佛說法相。大慧。①法性佛者。建立自證智所行。離心自性相。大慧。③化佛說施。戒。忍。進。禪定。智慧。蘊。界。處法。及諸解脫。諸識行相。建立差別。越外道見。超無色行。復次。大慧。①法性佛。非所攀緣。一切所緣。一切所作。相根量等相。悉皆遠離。非凡夫二乘。及諸外道。執著我相。所取境界。是故大慧。於自證聖智。勝境界相。當勤修學。於自心所現。分別見相。當速捨離。(国訳 50-51)」

◇『大乘入楞伽經』(卷6)變化品第七 T16,622b「又③變化佛與化聲。聞而授記別。非①法性佛。(国訳 189)」

◆次は、①「法身」＝「真如智慧仏」であることをしめすものである。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷1)一切佛語心品第一 T16,481b「云何為化佛。云何報生佛。云何如如佛。云何智慧佛。(新国訳 8)」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷1)一切佛語心品第一 T16,482b「云何為化佛。云何為報佛。云何為如如。平等智慧佛。(新国訳 13)」

◇『入楞伽經』(卷1)問答品第二 T16,520a「何等為化佛。何等為報佛。何等如智佛。何因為我說。(一切 21)」

◇『入楞伽經』(卷1)問答品第二 T16,521a「云何化報佛。何因而問我。云何如智佛。(一切 26)」

◇『大乘入楞伽經』(卷1)集一切法品第二 T16,591c「云何變化佛。云何為報佛。真如智慧佛。願皆為我說。(国訳 25)」

◇『大乘入楞伽經』(卷1)集一切法品第二 T16,592c「云何化及報。真如智慧佛。(国訳 30)」

◆次によれば、「真如」＝「円成」とされる。先述したところによれば、「真如」＝「法身」である。したがって、「真如」＝「法身」＝「円成」であることになる。

◇『入楞伽經』(卷9)總品第十八之一 T16,569b「不二。真如。空。實際及法體。我説無分別。成就彼法相。(一切 190)」

◇『大乘入楞伽經』(卷6)偈頌品第十之初 T16,628a「真如。空。不二。實際及法性。皆無有分別。我說是圓成。(国訳 217)」

◆次によれば、「円成の相(筆者は思うに、真如すなわち法身のいわば総合的な特徴)」＝「如如たる相(いわば形的な特徴)」＋「正智たる相(いわば質的な特徴)」とされる<sup>32)</sup>。したがって、「法身の相」＝「如如たる相」＋「正智たる相」であることになる。この点も、「法身」＝「真如智慧仏」であることをしめすものといえよう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷1)一切佛語心品第一 T16,487c「正智如如。是則成相。(新国訳 44)」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷4)一切佛語心品之四 T16,511b「五法三自性。及與八種識。二種無有我。悉攝摩訶衍。名相虛妄想。自性二種相。正智及如如。是則為成相。(新国訳 201)」

◇『入楞伽經』(卷3)集一切佛法品[3]第三之二 T16,527c「真如正妙智。是第一義相。(一切 47)」

<sup>32</sup> 筆者は思うに、我我所として「真如」と呼び得るものは、我である真我によって発現された我所として一つには「如如(すなわち真如たる)相(特徴)」をもつということになる。

◇『入楞伽經』(卷7)五法門品第十二 T16,558a「五法自體相。及與八種識。二種無我法。攝取諸大乘。名相及分別。三法自體相。正智及真如。是第一義相。(一切149)」

◇『大乘入楞伽經』(卷2)集一切法品第二之二 T16,598a「正智真如。是圓成性。(国訳57)」

◇『大乘入楞伽經』(卷5)刹那品第六 T16,620c「五法三自性。及與八種識。二種無我法。普攝於大乘。名相及分別。二種自性攝。正智與如如。是則圓成相。(国訳180)」

◆これまで分析してきたところを式化すれば、次のようになる。

〈①「我我所」〉 = 〈②「我」〉 + 〈③「我所」〉

〈①究極の「法身」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③初期状態の「心」〉

〈①「円成」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③(「如如」 + 「正智」)〉

なお、以上は、『金光明經』新本が説くところに通じるものである<sup>33)</sup>。

◆『楞伽經』の仏身論を特徴づけるものとして、さらに「意成身(あるいは「意生身)」という言葉もあげられよう。それは、先述したように、真如や涅槃と同義で、(広義の)法身のことであり、意(すなわち心の作用)によって発現される仏身を意味するらしい。たとえば、次はその例である。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷3)一切佛語心品之三 T16,500b「如如與空際。涅槃及法界。種種意生身。我說為心量。(新国訳130)」

◇『入楞伽經』(卷5)佛心品第四 T16,543c「真如。空。實際。涅槃。及法界。意身。身心等。故我說唯心。分別依熏縛。心依諸境生。眾生見外境。故我說唯心。(一切99-100)」

◇『大乘入楞伽經』(卷4)無常品第三之一 T16,610a「真如。空。實際。涅槃。及法界。種種意成身。我說是心量。妄想習氣縛。種種從心生。眾生見為外。我說是心量。外所見非有。而心種種現。身資及所住。我說是心量。(国訳121)」

## 8. 『楞伽經』が説く仏身の特徴

### 8-1. 法身の特徴

ここでは、『楞伽經』が説く法身が、衆生の次元においては、次のような特徴をもつものであることを述べる。①「見えない」ものである。②広大無限なるものである。③常なるものである。④楽(すなわち不動不変)なるものではない。⑤空なるものである。⑥そもそもは浄なるものである。したがって、③から⑥をまとめれば、常楽我浄なるものではない。

①法身は、「見えない」ものである。

◆次によれば、法身は、無相とされるから、「見えない」ものである。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷4)一切佛語心品之四 T16,506a-b「我說如來。非無性。亦非不生不滅。攝一切法。亦不待緣故。不生不滅。亦非無義。大慧。我說。意生法身。如來名號。彼不生者。一切外道。聲聞。緣覺。七住菩薩。非其境界。大慧。彼不生即如來異名。...有知無生者。有知無滅者。有知空者。有知如如者。有知諦者。有知實際者。有知法性者。有知涅槃者。有知常者。有知平等者。有知不二者。有知無相者。有知解脫者。有知道者。有知意生者。(新国訳165-166)」

<sup>33</sup> 別稿「『金光明經』が説く」を参照。

◇『入楞伽經』（卷 6）法身品第七 T16,551a-b「如來法身。非是無物。亦非一切法。不生不滅。亦不得言。依因緣有。亦非虛妄說。不生不滅。大慧。我常說言。不生不滅者。名意生身。如來法身。非諸外道聲聞辟支佛境界故。住七地菩薩。亦非境界。大慧。我言。不生不滅者。即如來異名。...有知不生者。有知不滅者。有知空者。有知真如者。有知實際者。有知涅槃者。有知法界者。有知法性者。有知常者。有知平等者。有知不二者。有知無相者。有知緣者。有知佛體者。有知因者。有知解脫者。有知道者。有知實諦者。有知一切智者。有知意生身者。（一切 124-125）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 5）無常品第三之餘 T16,615b-c「我說。如來非是無法。亦非攝取。不生不滅。亦不待緣。亦非無義。我說無生。即是如來。意生法身。別異之名。一切外道。聲聞獨覺。七地菩薩。不了其義。...知無滅者。知無生者。知性空者。知真如者。知是諦者。知實性者。知實際者。知法界者。知涅槃者。知常住者。知平等者。知無二者。知無相者。知寂滅者。知具相者。知因緣者。知佛性者。知教導者。知解脫者。知道路者。知一切智者。知最勝者。知意成身者。（国訳 150-152）」

②法身は、廣大無限なるものである。

◆次によれば、法身は量に限り有るなしとされるから、廣大無限なるものである<sup>34</sup>。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 4）一切佛語心品之四 T16,511c-512a「如是。大慧。如來法身。如恒沙不壞。大慧。譬如恒沙。無有限量。如來光明。亦復如是。無有限量。為成熟眾生故。普照一切。諸佛大眾。大慧。譬如恒沙。別求異沙。永不可得。如是。大慧。如來。應供。等正覺。無生生死滅。有因緣斷故。大慧。譬如恒河沙。增減不可得知。如是。大慧。如來智慧。成熟眾生。不增不減。非身法故。身法者有壞。如來法身。非是身法。（新国訳 202-203）」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 4）一切佛語心品之四 T16,513b「真如來者。離一切根量。（新国訳 211）」

◇『入楞伽經』（卷 7）恒河沙品第十三 T16,558c-559a「大慧。諸佛如來。亦復如是。諸佛如來。法身之體。如恒河河沙等。不滅不失故。大慧。譬如恒河河沙。無量無邊。大慧。諸佛如來。亦復如是。出於世間。放無量光。遍於一切。諸佛大會。為化眾生。令覺知故。大慧。如恒河河沙。更不生相。如彼微塵。微塵體相。如是而住。大慧。諸佛如來。亦復如是。於世間中。不生不滅。諸佛如來。斷有因故。大慧。如恒河河沙。若出於河。亦不可見。入於河中。亦不可見。亦不起心。我出入河。大慧。諸佛如來。智慧之力。亦復如是。度諸眾生。亦不盡滅。亦不增長。何以故。諸法無身故。大慧。一切有身。皆是無常。磨滅之法。非無身法。諸佛如來。唯法身故。（一切 151）」

◇『入楞伽經』（卷 8）化品第十五 T16,560c「根本如來。遠離諸根。大小諸量。（一切 157）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 5）剎那品第六 T16,621a「如來法身。亦復如是。如恒河沙。終不壞滅。大慧。譬如恒沙。無有限量。如來光明。亦復如是。為欲成就。無量眾生。普照一切。諸佛大會。大慧。譬如恒沙。住沙自性。不更改變。而作餘物。如來亦爾。於世間中。不生不滅。諸有生因。悉已斷故。大慧。譬如恒沙。取不知滅。投不見增。諸佛亦爾。以方便智。成熟眾生。無減無增。何以故。如來法身。無有身故。大慧。以有身故。而有滅壞。法身無身。故無滅壞。

<sup>34</sup> 正確には、衆生が認識できる次元を超えたものということらしい。次を参照。高崎直道・堀内俊郎（校註）『楞伽經（楞伽阿跋多羅寶經）』、2015年、211頁。

(国訳 182)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 6) 變化品第七 T16,622c 「眞實如來。離諸限量。(国訳 190)」

③法身は、常なるものである。

◆次によれば、法身は、常なるものとされる。ただし、法身は、心によって発現されるものであるから、総体(あるいは究極のもの)としては常なるものということであろう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,506a-b 「我説如來。非無性。亦非不生不滅。攝一切法。亦不待緣故。不生不滅。亦非無義。大慧。我説。意生法身。如來名號。彼不生者。一切外道。聲聞。緣覺。七住菩薩。非其境界。大慧。彼不生即如來異名。...有知無生者。有知無滅者。有知空者。有知如如者。有知諦者。有知實際者。有知法性者。有知涅槃者。有知常者。有知平等者。有知不二者。有知無相者。有知解脫者。有知道者。有知意生者。(新国訳 165-166)」

◇『入楞伽經』(卷 6) 法身品第七 T16,551a-b 「如來法身。非是無物。亦非一切法。不生不滅。亦不得言。依因緣有。亦非虛妄説。不生不滅。大慧。我常説言。不生不滅者。名意生身。如來法身。非諸外道聲聞辟支佛境界故。住七地菩薩。亦非境界。大慧。我言。不生不滅者。即如來異名。...有知不生者。有知不滅者。有知空者。有知眞如者。有知實際者。有知涅槃者。有知法界者。有知法性者。有知常者。有知平等者。有知不二者。有知無相者。有知緣者。有知佛體者。有知因者。有知解脫者。有知道者。有知實諦者。有知一切智者。有知意生身者。(一切 124-125)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 無常品第三之餘 T16,615b-c 「我説。如來非是無法。亦非攝取。不生不滅。亦不待緣。亦非無義。我説無生。即是如來。意生法身。別異之名。一切外道。聲聞獨覺。七地菩薩。不了其義。...知無滅者。知無生者。知性空者。知眞如者。知是諦者。知實性者。知實際者。知法界者。知涅槃者。知常住者。知平等者。知無二者。知無相者。知寂滅者。知具相者。知因緣者。知佛性者。知教導者。知解脫者。知道路者。知一切智者。知最勝者。知意成身者。(国訳 150-152)」

④法身は、樂(すなわち不動不変)なるものではない。

◆次によれば、法身(すなわち眞如、涅槃、意成身)は、心によって発現されるものとされる。したがって、変化するものであるから、樂なるものではない。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 3) 一切佛語心品之三 T16,500b 「如如與空際。涅槃及法界。種種意生身。我説為心量。(新国訳 130)」

◇『入楞伽經』(卷 5) 佛心品第四 T16,543c 「眞如。空。實際。涅槃。及法界。意身。身心等。故我説唯心。分別依熏縛。心依諸境生。眾生見外境。故我説唯心。(一切 99-100)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 4) 無常品第三之一 T16,610a 「眞如。空。實際。涅槃。及法界。種種意成身。我説是心量。妄想習氣縛。種種從心生。眾生見為外。我説是心量。外所見非有。而心種種現。身資及所住。我説是心量。(国訳 121)」

◆次によれば、心(すなわち阿頼耶識すなわち蔵識)は、煩惱に覆われて不浄なるものになるとされる。したがって、法身は、それにともない不浄なるものに変化するわけであるから、樂なるものではない。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,510b 「外道不覺。計著作者。為無始虛

偽。惡習所薰。名為識藏。生無明住地。與七識俱。如海浪身。常生不斷。離無常過。離於我論。自性無垢。畢竟清淨。(新国訳 192)」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,510c「此如來藏識藏。一切聲聞。緣覺心想所見。雖自性淨。客塵所覆故。猶見不淨。非諸如來。大慧。如來者。現前境界。猶如掌中。視阿摩勒果。(新国訳 194)」

◇『入楞伽經』(卷 7) 佛性品第十一 T16,556b-c「諸外道等。妄計我故。不能如實。見如來藏。以諸外道。無始世來。虛妄執著。種種戲論。諸熏習故。大慧。阿梨耶識者。名如來藏。而與無明。七識共俱。如大海波。常不斷絕。身俱生故。離無常過。離於我過。自性清淨。(一切 143-144)」

◇『入楞伽經』(卷 7) 佛性品第十一 T16,557a「此如來心。阿梨耶識。如來藏諸境界。一切聲聞。辟支佛。諸外道等。不能分別。何以故。以如來藏。是清淨相。客塵煩惱。垢染不淨。(一切 145)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 刹那品第六 T16,619c「外道不知。執為作者。無始虛偽。惡習所熏。名為藏識。生於七識。無明住地。譬如大海。而有波浪。其體相續。恒注不斷。本性清淨。離無常過。離於我論。(国訳 174)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 刹那品第六 T16,619c-620a「此如來藏藏識。本性清淨。客塵所染。而為不淨。一切二乘。及諸外道。臆度起見。不能現證。如來於此。分明現見。如觀掌中。菴摩勒果。国訳 175)」

◆次によれば、法身(すなわち如来藏)は、不淨なるものになるとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 2) 一切佛語心品之二 T16,489a-b「爾時。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊世尊。修多羅說。如來藏。自性清淨。轉三十二相。入於一切。眾生身中。如大價寶。垢衣所纏。如來之藏。常住不變。亦復如是。而陰界入。垢衣所纏。貪欲恚癡。不實妄想。塵勞所汚。一切諸佛。之所演說。(新国訳 55)」

◇『入楞伽經』(卷 3) 集一切佛法品第三之二 T16,529b「爾時聖者。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊世尊。如修多羅說。如來藏。自性清淨。具三十二相。在於一切。眾生身中。為貪瞋癡。不實垢染。陰界入衣。之所纏裹。如無價寶。垢衣所纏。如來世尊。復說常恒。清涼不變。(一切 53)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 2) 集一切法品第二之二 T16,599b「爾時。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊。修多羅中。說如來藏。本性清淨。常恒不斷。無有變易。具三十二相。在於一切。眾生身中。為蘊界處。垢衣所纏。貪恚癡等。妄分別垢。之所污染。如無價寶。在垢衣中。(国訳 64)」

◆次によれば、法身のブツダは、説法するとされる。したがって、変化するものであるから、楽なるものではない。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 1) 一切佛語心品第一 T16,486a-b「大慧。法佛者。離心自性相。自覺聖所緣境界。建立施作。...大慧。又法佛者。離攀緣。所緣離。一切所作。根量相滅。非諸凡夫。聲聞。緣覺。外道。計著我相。所著境界。自覺聖究竟。差別相建立。是故。大慧。自覺聖差別相。當勤修學。自心現見。應當除滅。(新国訳 34-35)」

◇『入楞伽經』(卷 2) 集一切佛法品第三之一 T16,525b-c「大慧。法佛說法者。離心相應體故。內證聖行境界故。大慧。是名法佛說法之相。...復次。大慧。法佛說法者。離攀緣故。離能觀所觀故。離所作相量相故。大慧。非諸凡夫。聲聞緣覺。外道境界故。以諸外道。執著虛妄我

相故。是故。大慧。如是內身自覺。修行勝相。當如是學。大慧。汝當應離。見自心相。以為非實。(一切 40)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 2) 集一切法品第二之二 T16,596b-c「大慧。法性佛者。建立自證智所行。離心自性相。…復次。大慧。法性佛。非所攀緣。一切所緣。一切所作。相根量等相。悉皆遠離。非凡夫二乘。及諸外道。執著我相。所取境界。是故大慧。於自證聖智。勝境界相。當勤修學。於自心所現。分別見相。當速捨離。(国訳 50-51)」

◆次によれば、法身のブツダは、自証聖智(すなわち初期状態の心あるいはその成分のようなもの)による三昧の境地(いわば絶対的なものの有り様)を説くとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 2) 一切佛語心品之二 T16,491b「大慧。若說彼性。自性共相。一切皆是。化佛所說。非法佛說。又諸言說。悉由愚夫。悵望見生。不為別建立趣。自性法得。聖智自覺。三昧樂住者。分別顯示。(新国訳 68)」

◇『入楞伽經』(卷 3) 集一切佛法品第三之二 T16,532a「大慧。說有無法。自相同相。是名應化佛說。非法佛說。復次。大慧。應化如來。說如是法。隨順愚癡。凡夫見心。令其修行。非為建立。如實修行。示現自身。內證聖智。三昧樂行故。(一切 61)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 3) 集一切法品第二之三 T16,601b「大慧。一切諸法。自相共相。是化佛說。非法佛說。大慧。化佛說法。但順愚夫。所起之見。不為顯示。自證聖智。三昧樂境。(国訳 75)」

◆ただし、次によれば、常住不変、無減無増(不増不減)なるものとされるから、法身は、総体(あるいは究極のもの)としては、樂なるものということであろう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 2) 一切佛語心品之二 T16,489a-b「爾時。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊世尊。修多羅說。如來藏。自性清淨。轉三十二相。入於一切。眾生身中。如大價寶。垢衣所纏。如來之藏。常住不變。亦復如是。而陰界入。垢衣所纏。貪欲愚癡。不實妄想。塵勞所汚。一切諸佛。之所演說。(新国訳 55)」

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,511c-512a「如是。大慧。如來法身。如恒沙不壞。大慧。譬如恒沙。無有數量。如來光明。亦復如是。無有數量。為成熟眾生故。普照一切。諸佛大眾。大慧。譬如恒沙。別求異沙。永不可得。如是。大慧。如來。應供。等正覺。無生死生滅。有因緣斷故。大慧。譬如恒河沙。増減不可得知。如是。大慧。如來智慧。成熟眾生。不増不減。非身法故。身法者有壞。如來法身。非是身法。(新国訳 202-203)」

◇『入楞伽經』(卷 3) 集一切佛法品第三之二 T16,529b「爾時聖者。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊世尊。如修多羅說。如來藏。自性清淨。具三十二相。在於一切。眾生身中。為貪瞋癡。不實垢染。陰界入衣。之所纏裹。如無價寶。垢衣所纏。如來世尊。復說常恒。清涼不變。(一切 53)」

◇『入楞伽經』(卷 7) 恒河沙品第十三 T16,558c-559a「大慧。諸佛如來。亦復如是。諸佛如來。法身之體。如恒河河沙等。不減不失故。大慧。譬如恒河河沙。無量無邊。大慧。諸佛如來。亦復如是。出於世間。放無量光。遍於一切。諸佛大會。為化眾生。令覺知故。大慧。如恒河河沙。更不生相。如彼微塵。微塵體相。如是而住。大慧。諸佛如來。亦復如是。於世間中。不生不滅。諸佛如來。斷有因故。大慧。如恒河河沙。若出於河。亦不可見。入於河中。亦不可見。亦不起心。我出入河。大慧。諸佛如來。智慧之力。亦復如是。度諸眾生。亦不盡滅。亦不增長。何以故。諸法無身故。大慧。一切有身。皆是無常。磨滅之法。非無身法。諸佛如來。唯法身故。(一切 151)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 2) 集一切法品第二之二 T16,599b「爾時。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊。修多羅中。說如來藏。本性清淨。常恒不斷。無有變易。具三十二相。在於一切。眾生身中。為蘊界處。垢衣所纏。貪恚癡等。妄分別垢。之所污染。如無價寶。在垢衣中。(国訳 64)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 剎那品第六 T16,621a「如來法身。亦復如是。如恒河沙。終不壞滅。大慧。譬如恒沙。無有限量。如來光明。亦復如是。為欲成就。無量眾生。普照一切。諸佛大會。大慧。譬如恒沙。住沙自性。不更改變。而作餘物。如來亦爾。於世間中。不生不滅。諸有生因。悉已斷故。大慧。譬如恒沙。取不知滅。投不見增。諸佛亦爾。以方便智。成熟眾生。無滅無增。何以故。如來法身。無有身故。大慧。以有身故。而有滅壞。法身無身。故無滅壞。(国訳 182)」

⑤法身は、空なるものである。

◆次によれば、法身は、空(あるいは性空)なるものとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,506a-b「我説如來。非無性。亦非不生不滅。攝一切法。亦不待緣故。不生不滅。亦非無義。大慧。我説。意生法身。如來名號。彼不生者。一切外道。聲聞。緣覺。七住菩薩。非其境界。大慧。彼不生即如來異名。...有知無生者。有知無滅者。有知空者。有知如如者。有知諦者。有知實際者。有知法性者。有知涅槃者。有知常者。有知平等者。有知不二者。有知無相者。有知解脫者。有知道者。有知意生者。(新国訳 165-166)」

◇『入楞伽經』(卷 6) 法身品第七 T16,551a-b「如來法身。非是無物。亦非一切法。不生不滅。亦不得言。依因緣有。亦非虛妄説。不生不滅。大慧。我常説言。不生不滅者。名意生身。如來法身。非諸外道聲聞辟支佛境界故。住七地菩薩。亦非境界。大慧。我言。不生不滅者。即如來異名。...有知不生者。有知不滅者。有知空者。有知真如者。有知實際者。有知涅槃者。有知法界者。有知法性者。有知常者。有知平等者。有知不二者。有知無相者。有知緣者。有知佛體者。有知因者。有知解脫者。有知道者。有知實際者。有知一切智者。有知意生身者。(一切 124-125)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 無常品第三之餘 T16,615b-c「我説。如來非是無法。亦非攝取。不生不滅。亦不待緣。亦非無義。我説無生。即是如來。意生法身。別異之名。一切外道。聲聞獨覺。七地菩薩。不了其義。...知無滅者。知無生者。知性空者。知真如者。知是諦者。知實性者。知實際者。知法界者。知涅槃者。知常住者。知平等者。知無二者。知無相者。知寂滅者。知具相者。知因緣者。知佛性者。知教導者。知解脫者。知道路者。知一切智者。知最勝者。知意成身者。(国訳 150-152)」

◆次によれば、法身は、世間(すなわち衆生の次元)においては、空(すなわち無所有)なるものとされる。

◇『入楞伽經』(卷 9) 總品第十八之一 T16,574b「如分別法相。現見種種法。彼法無種種。法佛世間爾。(一切 212)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 7) 偈頌品第十之二 T16,631c「法佛於世間。猶如妄計性。雖見有種種。而實無所有。(国訳 234)」

⑥法身は、そもそもは淨(清淨)なるものである。

◆次によれば、法身（すなわち如来藏）は、そもそもは清浄なるものとされる。なお、法身が三十二相をもつものとされる点は、注目されよう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 2）一切佛語心品之二 T16,489a-b 「爾時。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊世尊。修多羅說。如來藏。自性清淨。轉三十二相。入於一切。眾生身中。如大價寶。垢衣所纏。如來之藏。常住不變。亦復如是。而陰界入。垢衣所纏。貪欲恚癡。不實妄想。塵勞所污。一切諸佛。之所演說。（新国訳 55）」

◇『入楞伽經』（卷 3）集一切佛法品第三之二 T16,529b 「爾時聖者。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊世尊。如修多羅說。如來藏。自性清淨。具三十二相。在於一切。眾生身中。為貪瞋癡。不實垢染。陰界入衣。之所纏裹。如無價寶。垢衣所纏。如來世尊。復說常恒。清涼不變。（一切 53）」

◇『入楞伽經』（卷 10）總品第十八之二 T16,583a 「內身修實行。我是清淨相。如來藏佛境。妄覺非境界。」

◇『大乘入楞伽經』（卷 2）集一切法品第二之二 T16,599b 「爾時。大慧菩薩摩訶薩。白佛言。世尊。修多羅中。說如來藏。本性清淨。常恒不斷。無有變易。具三十二相。在於一切。眾生身中。為蘊界處。垢衣所纏。貪恚癡等。妄分別垢。之所污染。如無價寶。在垢衣中。（国訳 64）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 7）偈頌品第十之二 T16,637b 「內證智所行。清淨真我相。此即如來藏。非外道所知。（国訳 264）」

◆したがって、③から⑥をまとめれば、法身は、衆生の次元においては、あくまで常樂我淨なる（四つの特徴を同時にあわせもつ）ものではない。

## 8-2.報身の特徴

◆次によれば、報身は、法身にもとづき発現される。

◇『入楞伽經』（卷 9）總品第十八之一 T16,575c 「說是真法習。所有集作化。是諸佛根本。餘者應化佛。（一切 217）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 7）偈頌品第十之二 T16,632b 「依法身有報。從報起化身。此為根本佛。餘皆化所現。（国訳 238）」

◆次によれば、報身のブツダは、色究竟天で仏事をおこなう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 1）一切佛語心品第一 T16,486a 「彼諸依佛。亦復如是。〈依者。胡本云津膩。謂化佛。是真佛氣分也〉。頓熟眾生。所處境界。以修行者。安處於彼。色究竟天。譬如法佛。所作依佛。光明照曜。自覺聖趣。亦復如是。彼於法相。有性無性。惡見妄想。照令除滅。（新国訳 34）」

◇『入楞伽經』（卷 2）集一切佛法品第三之一 T16,525b 「報佛如來。亦復如是。一時成熟。諸眾生界。置究竟天。淨妙宮殿。修行清淨之處。大慧。譬如法佛報佛。放諸光明。有應化佛。照諸世間。大慧。內身聖行。光明法體。照除世間。有無邪見。亦復如是。（一切 39）」

◇『大乘入楞伽經』（卷 2）集一切法品第二之二 T16,596b 「報佛亦爾。於色究竟天。頓能成熟。一切眾生。令修諸行。譬如法佛。頓現報佛。及以化佛。光明照曜。自證聖境。亦復如是。頓現法相。而為照曜。令離一切。有無惡見。（国訳 50）」

◆次によれば、報身のブツダは、いわば空なるものを説くとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』（卷 1）一切佛語心品第一 T16,486a 「大慧。法依佛。說一切法。入自

相共相。自心現習氣因相續。妄想自性計著因。種種無實幻。種種計著。不可得。復次。大慧。計著緣起自性。生妄想自性相。大慧。如工幻師。依草木瓦石。作種種幻。起一切眾生。若干形色。起種種妄想。彼諸妄想。亦無真實。如是。大慧。依緣起自性。起妄想自性。種種妄安心。種種想行。事妄想相。計著習氣妄想。大慧。是為妄想自性相生。大慧。是名依佛說法。  
(新国訳 34)」

◇『入楞伽經』(卷 2) 集一切佛法品第三之一 T16,525b 「復次。大慧。法佛報佛。說一切法。自相同相故。因自心現見。薰習相故。因虛妄分別。戲論相縛故。如所說法。無如是體故。大慧。譬如幻師幻作。一切種種形像。諸愚癡人。取以為實。而彼諸像。實不可得。復次。大慧。虛妄法體。依因緣法。執著有實。分別而生。大慧。如巧幻師。依草木瓦石。作種種事。依於呪術。人工之力。成就一切眾生。形色身分之相。名幻人像。眾生見幻。種種形色。執著為人。而實無人。大慧。眾生雖見。以為是人。無實人體。大慧。因緣法體。隨心分別。亦復如是。以見心相。種種幻故。何以故。以執著虛妄相。因分別心薰習故。大慧。是名分別虛妄體相。大慧。是名報佛說法之相。(一切 39-40)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 2) 集一切佛法品第二之二 T16,596b 「復次。大慧。法性所流佛。說一切法。自相共相。自心現習氣因相。妄計性所執因相。更相繫屬。種種幻事。皆無自性。而諸眾生。種種執著。取以為實。悉不可得。復次。大慧。妄計自性。執著緣起自性起。大慧。譬如幻師以幻術力。依草木瓦石。幻作眾生。若干色像。令其見者。種種分別。皆無真實。大慧。此亦如是。由取著境界。習氣力故。於緣起性中。有妄計性。種種相現。是名妄計性生。大慧。是名法性所流佛說法相。(国訳 50)」

### 8-3.化身の特徴

◆次によれば、化身は、報身にもとづき発現される。

◇『入楞伽經』(卷 9) 總品第十八之一 T16,575c 「說是真法習。所有集作化。是諸佛根本。餘者應化佛。(一切 217)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 7) 偈頌品第十之二 T16,632b 「依法身有報。從報起化身。此為根本佛。餘皆化所現。(国訳 238)」

◆次によれば、化身のブッダは、数限りなく、あらゆるところに発現される。

◇『入楞伽經』(卷 9) 總品第十八之一 T16,566a 「應化無量億。彼體中出世。愚人聞佛法。如響不思議。(一切 176)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 6) 偈頌品第十之初 T16,625c 「化身無量億。遍遊一切處。令愚夫得聞。如響難思法。(国訳 207)」

◆次によれば、化身のブッダは、常に金剛力士によって護られる(ことが可能なもの)とされる。一方、真のブッダ(すなわち法身のブッダ)は、衆生の次元を超えたものであるから、そのようなものではないとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,513b 「大慧。金剛力士。所隨護者。是化佛耳。非真如來。大慧。真如來者。離一切根量。一切凡夫。聲聞緣覺。及外道。根量悉滅。得現法樂住。無間法智忍故。非金剛力士所護。(新国訳 211)」

◇『入楞伽經』(卷 8) 化品第十五 T16,560c 「大慧。金剛密迹。常隨侍衛。應化如來。前後圍遶。非法佛報佛。根本如來。應。正遍知。大慧。根本如來。遠離諸根。大小諸量。遠離一切。凡夫聲聞。辟支佛等。大慧。如實修行。得彼真如樂行境界者。知根本佛。以得平等法忍故。

是故金剛密迹。隨應化佛。(一切 157-158)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 6) 變化品第七 T16,622c「大慧。變化如來。金剛力士。常隨衛護。非真實佛。真實如來。離諸限量。二乘外道。所不能知。住現法樂。成就智忍。不假金剛。力士所護。(国訳 190)」

◆次によれば、化身のブツダは、六波羅蜜などを説くとされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 1) 一切佛語心品第一 T16,486a-b「大慧。化佛者説。施。戒。忍。精進。禪定。及心智慧。離陰界入。解脫識相。分別觀察建立。超外道見。無色見。(新国訳 34-35)」

◇『入楞伽經』(卷 2) 集一切佛法品第三之一 T16,525c「大慧。應化佛所作。應佛説。施。戒。忍。精進。禪定。智慧故。陰。界。入。解脫故。建立識想。差別行故。説諸外道。無色。三摩跋提次第相。大慧。是名應佛所作應佛説法相。(一切 40)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 2) 集一切法品第二之二 T16,596b「大慧。化佛説施。戒。忍。進。禪定。智慧。蘊。界。處。法。及諸解脫。諸識行相。建立差別。越外道見。超無色行。(国訳 50-51)」

◆次によれば、化身のブツダが説くところは、いわば方便とされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 2) 一切佛語心品之二 T16,491b「大慧。若説彼性。自性共相。一切皆是。化佛所説。非法佛説。又諸言説。悉由愚夫。悵望見生。不為別建立趣。自性法得。聖智自覺。三昧樂住者。分別顯示。(新国訳 68)」

◇『入楞伽經』(卷 3) 集一切佛法品第三之二 T16,532a「大慧。説有無法。自相同相。是名應化佛説。非法佛説。復次。大慧。應化如來。説如是法。隨順愚癡。凡夫見心。令其修行。非為建立。如實修行。示現自身。內證聖智。三昧樂行故。(一切 61)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 3) 集一切法品第二之三 T16,601b「大慧。一切諸法。自相共相。是化佛説。非法佛説。大慧。化佛説法。但順愚夫。所起之見。不為顯示。自證聖智。三昧樂境。(国訳 75)」

◆次によれば、化身のブツダは、必ずしも(真の)ブツダではなく、衆生のために説法はするが、自証聖智(すなわち初期状態の心あるいはその成分のようなもの)によって発現される境地(いわば絶対的なものの有り様)については説かない(説けない)とされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,513b「一切化佛。不從業生。化佛者。非佛不離佛。因陶家輪等。眾生所作。相而説法。非自通處。説自覺境界。(新国訳 211)」

◇『入楞伽經』(卷 8) 化品第十五 T16,560c-561a「應化佛者。無業無謗。而應化佛。不異法佛。報佛如來。而亦不一。如陶師鹽等。作所作事。應化佛作。化眾生事。異真實相説法。不説內所證法。聖智境界。(一切 158)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 6) 變化品第七 T16,622c「一切化佛。不從業生。非即是佛。亦非非佛。譬如陶師。眾事和合。而有所作。化佛亦爾。眾相具足。而演説法。然不能説。自證聖智。所行之境。(国訳 190)」

◆なお、次によれば、説かない方法をもって説く場合もあるとされる。いわゆるシャカの「不説一字」はそれに相当する。では不説をもってシャカは何を説いたかといえ、筆者は思うに、それは真我についてであったであろう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 3) 一切佛語心品之三 T16,498c「大慧復自佛言。如世尊所説。我從某夜。得最正覺。乃至某夜。入般涅槃。於其中間。乃至不説一字。亦不已説當説。不説是

佛説。大慧白佛言。世尊。如來。應供。等正覺。何因説言。不説是佛説。(新国訳 120)」

◇『入楞伽經』(卷 5) 佛心品第四 T16,541c「大慧菩薩。復白佛言。世尊。如來說言。我何等。夜。證大菩提。何等夜。入般涅槃。我於中間。不説一字。佛言非言。世尊依何等義。説如是語。佛語非語。(一切 92-93)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 4) 無常品第三之一 T16,608b「爾時。大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。如世尊説。我於某夜。成最正覺。乃至某夜。當入涅槃。於其中間。不説一字。亦不已説。亦不當説。不説是佛説。世尊。依何密意。作如是語。(国訳 112)」

## 9.その他

今後の研究において、さらに検討されるべきと思われる点を若干ながらあげておきたい。

### 9-1.三種の意成身(すなわち三種の意生身)

◆次によれば、意成身(すなわち意生身いわば広義の法身)には三種類あり、①一つ目は第三第四第五地の菩薩によって認識されるもので、②二つ目は第八地の菩薩によって認識されるもので、③三つ目はブツダの次元に達した者によって認識されるものとされる。したがって、意成身とは、菩薩によっても認識されるものであるから、二身説における法身に相当するものといえよう。一方、法身は、見る側の次元の違いにより、見え方(あるいは認識され方)が異なるだけにとらえることも可能であろう。したがって、ここからさらに、法身は実のところは常に同じ仏身のことと解釈を展開させることもできよう。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 3) 一切佛語心品之三 T16,497c-498a「爾時。世尊。告大慧菩薩摩訶薩言。意生身。分別通相。我今當説。諦聽諦聽。善思念之。大慧白佛言。善哉。世尊。唯然受教。佛告大慧。有三種意生身。云何為三。所謂。①三昧樂正受意生身。②覺法自性性意生身。③種類俱生無行作意生身。修行者。了知初地。上増進相。得三種身。大慧。云何①三昧樂正受意生身。謂。第三第四第五地。三昧樂正受故。種種自心寂靜。安住心海。起浪識相不生。知自心現境界性非性。是名①三昧樂正受意生身。大慧。云何②覺法自性性意生身。謂。第八地。觀察覺了。如幻等法。悉無所有。身心轉變。得如幻三昧。及餘三昧門。無量相。力。自在。明。如妙華莊嚴。迅疾如意。猶如幻夢。水月。鏡像。非造非所造。如造所造。一切色。種種支分。具足莊嚴。隨入一切。佛刹大眾。通達自性法故。是名②覺法自性性意生身。大慧。云何③種類俱生無行作意生身。所謂。覺一切佛法。緣自得樂相。是名③種類俱生無行作意生身。大慧。於彼三種身。相觀察覺了。應當修學。爾時。世尊。欲重宣此義。而説偈言。《非我乘大乘。非説亦非字。非諦非解脫。非無有境界。然乘摩訶衍。三摩提自在。種種意生身。自在華莊嚴。》(新国訳 113-114)」

◇『入楞伽經』(卷 5) 佛心品第四 T16,540b-c「爾時。佛告聖者大慧菩薩言。大慧。我今為汝。説意生身修行差別。大慧。諦聽諦聽。當為汝説。大慧白佛言。善哉世尊。唯然受教。佛告大慧。有三種意生身。何等為三。①一者。得三昧樂三摩跋提意生身。②二者。如實覺知諸法相意生身。③三者。種類生無作行意生身。菩薩從於初地。如實修行。得上上地。證智之相。大慧。何者菩薩摩訶薩。①得三昧樂三摩跋提意生身。謂。第三第四。第五地中。自心寂靜。行種種行。大海心波。轉識之相。三摩跋提樂。名意識生。以見自心境界故。如實知有無相。大

慧。是名意生身相。大慧。何者②如實覺知諸法相意生身。謂。菩薩摩訶薩。於八地中。觀察覺了。得諸法無相。如幻等法。悉無所有。身心轉變。得如幻三昧。及餘無量。三摩跋提樂門。無量相力。自在神通。妙華莊嚴。迅疾如意。猶如幻夢。水中月。鏡中像。非四大生。似四大相。具足身分。一切修行。得如意自在。隨入諸佛。國土大眾。大慧。是名②如實覺知諸法相意生身。大慧。何者③種類生無作行意生身。謂。自身內證。一切諸法。如實樂相。法相樂故。大慧。是名③種類生無作行意生身。大慧。汝當於彼。三種身相。觀察了知。爾時世尊。重說偈言：《我乘非大乘。非說亦非字。非諦非解脫。非無有境界。然乘摩訶衍。三摩提自在。種種意生身。自在華莊嚴。》(一切 89-90)」

◇『大乘入楞伽經』(卷4)無常品第三之一 T16,607b-c「爾時。佛告大慧菩薩摩訶薩言。今當為汝。說意成身差別相。諦聽諦聽。善思念之。大慧言。唯。佛言。大慧。意成身有三種。何者為三。謂。①入三昧樂意成身。②覺法自性意成身。③種類俱生無作行意成身。諸修行者。入初地已。漸次證得。大慧。云何①入三昧樂意成身。謂。三四五地。入於三昧。離種種心。寂然不動。心海不起。轉識波浪。了境心現。皆無所有。是名①入三昧樂意成身。云何②覺法自性意成身。謂。八地中。了法如幻。皆無有相。心轉所依。住如幻定。及餘三昧。能現無量。自在神通。如花開敷。速疾如意。如幻如夢。如影如像。非四大造。與造相似。一切色相。具足莊嚴。普入佛刹。了諸法性。是名②覺法自性意成身。云何③種類俱生無作行意成身。謂。了達諸佛。自證法相。是名③種類俱生無作行意成身。大慧。三種身相。當勤觀察。爾時世尊。重說頌言。《我大乘非乘。非聲亦非字。非諦非解脫。亦非無相竟。然乘摩訶衍。三摩提自在。種種意成身。自在花莊嚴。》(国訳 108-109)」

## 9-2.色究竟天と大自在天

『楞伽經』が説く色究竟天と大自在天についての内容および仏身論は、『大智度論』の(少なくとも最も重要な部分の一部の)成立があるいは五世紀初めにまで下る可能性があることをしめすものである。この点には、大いに注意が払われるべきであろう。というのは、東アジア仏教において最も代表的な論書の一つである『大智度論』の原本は、三世紀半ば以前に中観派の始祖である龍樹(ナーガールジュナ、後150年頃-250年頃)が『大品般若経』に注したものと広く伝えられているからである<sup>35)</sup>。なお、漢訳『大智度論』は、後秦の鳩摩羅什(350年頃-409年頃、一説に344-413年)によって402年から405年に訳出とされる。

先ずは、色究竟天と大自在天について考察するに、四世紀末の成立かとされる『楞伽經』は、龍樹との関連づけが認められる經典であることは先述したとおりであるが、色究竟天(と呼ばれる天層)を超えたところに住するとされることもある(菩薩の住处としての)大

<sup>35)</sup> 次を参照。鎌田茂雄ほか(編)『大蔵経全解説大事典』(東京、雄山閣出版、1998年)、409-410頁、「大智度論」(笠井哲解説)。

次によれば、龍樹によるものは巻34までで、以下は鳩摩羅什の手が加わり短縮されたものとされる。小野玄妙(編)『佛書解説大辞典』第8巻(大東出版社、1974年)、9-12頁、10頁、「智度論」(眞野正順解題)。

自在天（あるいは摩醯首羅天とも呼ばれる天層）については説かない。この点は、『般若経』系の代表經典である『大品般若経』および『小品般若経』も同じである<sup>36</sup>。

◆『楞伽経』の次の内容によれば、色究竟天は、菩薩が成仏するところとされる。

◇『入楞伽経』（巻 9）總品第十八之一 T16,566a「阿迦尼妙境。離諸惡行處。常無分別行。離諸心數法。得力通自在。到諸三昧處。彼處成正覺。化佛此中成。（一切 176）」

◇『大乘入楞伽経』（巻 6）偈頌品第十之初 T16,625c「常行無分別。遠離心心法。住色究竟天。離諸過失處。於彼成正覺。具力通自在。及諸勝三昧。現化於此成。（国訳 206-207）」

◆『楞伽経』の次の内容によれば、大自在天（すなわち摩醯最勝處）は、仏地とされる。

◇『楞伽阿跋多羅寶経』（巻 4）一切佛語心品之四 T16,509c「心量無所有。此住及佛地。去來及現在。三世諸佛說。心量地第七。無所有第八。二地名為住。佛地名最勝。自覺智及淨。此則是我地。自在最勝處。清淨妙莊嚴。（新国訳 188）」

◇『入楞伽経』（巻 7）入道品第九 T16,555c「唯心無所有。諸行及佛地。去來現在佛。三世說如是。七地為心地。無所有八地。二地名為行。餘地名我地。內身證及淨。此名為我地。自在最勝處。阿迦尼吒天。（一切 140）」

◇『大乘入楞伽経』（巻 5）現證品第四 T16,619a「諸住及佛地。惟心無影像。此是去來今。諸佛之所說。七地是有心。八地無影像。此二地名住。餘則我所得。自證及清淨。此則是我地。摩醯最勝處。色究竟莊嚴。（国訳 169-170）」

一方、『大智度論』は、『華嚴経』十地品（あるいは単独經典としては『十地経』）および『瑜伽師地論』と同じく、色究竟天を超えたところに大自在天（という天層）が住し、そこに第十地のレベルにある菩薩が住すると説く<sup>37</sup>。したがって、『大智度論』によれば、菩薩は色究竟天では成仏しないことになるので、『楞伽経』と『大智度論』の内容は、重要なところで齟齬をきたす。筆者は思うに、『大智度論』が龍樹によるものであれば、そのようなことはないはずであろう。さもなければ、『楞伽経』を龍樹と関連づけることはできないであろう。したがって、『大智度論』の（少なくとも色究竟天と大自在天に関わる）内容は、龍樹によるものではないように思われるのである。また、『大品般若経』および『小品般若経』は、『大智度論』よりも古い般若経系の仏典であるから、色究竟天および大自在天にまつわる点に関して、『楞伽経』が『大品般若経』および『小品般若経』に通じるものであることは、『大智度論』が『楞伽経』に後行するものである可能性をしめすものともいえよう。

次に、仏身論について考察するに、二身説を説く仏典として、たとえば、『華嚴経』、『瑜伽師地論』、『涅槃経』があげられる<sup>38</sup>。一方、『楞伽経』と『大智度論』は、三身説を説く<sup>39</sup>。『華嚴経』は、大本としては四世紀中葉以前に成立したらしいとされるが<sup>40</sup>、裏を返せば、大本としての成立は四世紀中葉まで下る可能性がある。『瑜伽師地論』は、四世紀末

<sup>36</sup> *The Buddhist Heavens*, p.49, p.52.

<sup>37</sup> *The Buddhist Heavens*, p.56, p.60, p.61, p.78.

<sup>38</sup> 『涅槃経』と『華嚴経』については、別稿「『大乘涅槃経』が説く」および「『華嚴経』が説く」を参照。『瑜伽師地論』は、筆者の判断ながら、法身と色身による二身説を説くものである。

<sup>39</sup> 『大智度論』が法身と法性生身と生身をもってする三身説を説くととらえ得ることについては、別稿「『金光明経』が説く」を参照。

<sup>40</sup> 高崎直道『大乘仏教思想論 II』、301-346 頁、312-316 頁。

以前に成立とされるが<sup>41)</sup>、裏を返せば、成立は四世紀末まで下る可能性がある。また、『般若経』や『華嚴経』の影響の下に成立した『涅槃経』は、四世紀半ば(333年頃)以降に成立した可能性が高い<sup>42)</sup>。したがって、筆者は思うに、三身説の登場は、二身説の後であろうから、おそらくは四世紀に入ってからのことであろう<sup>43)</sup>。現在のところ、現在の理解をもってする『大智度論』を除けば、三身説を説き、明らかに三世紀以前に遡る仏典はしられない。『楞伽経』の成立も四世紀末かとされる<sup>44)</sup>。それゆえ、もし『大智度論』を龍樹によるものとするならば、『大智度論』はいわば孤立した内容をしめす論書ということになってしまう。

以上のとおりであるから、『大智度論』の成立を直ちに四世紀末よりも前に遡らせることはむずかしいのである。そして、ここで思い起こされるのが、漢訳『大智度論』は402年から405年に訳出とされる点である。それで、もしこれをとるべきとなれば、『大智度論』の(少なくとも最も重要な部分の一部の)成立の下限は、五世紀初めのまさに鳩摩羅什による漢訳時にまで下ることになってしまう。後考を待ちたい<sup>45)</sup>。

### 9-3.虚空

◆次によれば、虚空は、有なるものでも無なるものでもないとされる。したがって、虚空は空なるものということになる。一方、『涅槃経』によれば、虚空は無なるものとされる<sup>46)</sup>。

◇『入楞伽経』(巻9) 總品第十八之一 T16,571a 「如物非無物。我說虚空然。阿梨耶身中。離於有無物。(一切197)」

◇『大乘入楞伽経』(巻6) 偈頌品第十之初 T16,629a 「我說如虚空。非有亦非無。藏識亦如是。有無皆遠離。(国訳222)」

### 9-4.一世界一仏

◆次によれば、シャカは、一世界一仏を説いたとされる。ただし、『楞伽経』が説く「一世界」

---

<sup>41)</sup> 次は、『瑜伽師地論』は四世紀末以前のものとする。高崎直道・堀内俊郎(校註)『楞伽経(楞伽阿跋多羅宝経)』、2015年、73頁。

<sup>42)</sup> 別稿「『大乘涅槃経』が説く」(『参考資料集』)、5頁を参照。

<sup>43)</sup> 次によれば、三身説は『瑜伽師地論』の後に成立した『大乘莊嚴経論』菩提品あたりの例が最古のものらしい。勝呂信静・下川邊季由(校註)世親釈・玄奘訳『撰大乘論釈』新国訳大蔵経17瑜伽・唯識部11(大蔵出版、2007年)、解題11頁、解題63頁。

<sup>44)</sup> 高崎直道・堀内俊郎(校註)『楞伽経(楞伽阿跋多羅宝経)』、2015年、25頁、76頁。

<sup>45)</sup> 以上の点をさらに検討する時には、中国における二種法身説(したがって仏身の三身説)の事実上の創始者は鳩摩羅什とする次による指摘には、大いに注意が払われるべきであろう。船山徹「六朝時代における菩薩戒の受容過程:劉宋・南齊期を中心に」(『東方學報』67、1995年)、1-135頁、100頁。また、大乘仏教史上最も偉大な思想家と評価されることもあるヴァスバンドゥの生没年に関しては、『楞伽経』とそれに先行するとされる『唯識三十頌』の成立年代が重要な論点の一つとされる。次を参照。船山徹『婆藪槃豆伝:インド仏教思想家ヴァスバンドゥの伝記』(法蔵館、2021年)、i頁、222頁、224-225頁。高崎直道・堀内俊郎(校註)『楞伽経(楞伽阿跋多羅宝経)』、2015年、72頁。

<sup>46)</sup> 別稿「大乘涅槃経が説く」(『参考資料集』)、9-10頁。

の意味するところは、不明である。

◇『楞伽阿跋多羅寶經』(卷 4) 一切佛語心品之四 T16,507b「而世尊說。一世界中。多佛出世者。無有是處。(新国訳 171)」

◇『入楞伽經』(卷 6) 法身品第七 T16,552b「如來常說。一世界中。而有多佛。俱出世者。無有是處。(一切 128)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 5) 無常品第三之餘 T16,616b「世尊常說。一世界中。無有多佛。(国訳 156)」

### 9-5.第九識

宋訳では、「阿頼耶識」(すなわち「心」)を意味する「第八識」までしか説かれていないが、一方、次のように、魏訳および唐訳では、後の増広とされる偈頌品(總品)において、いわば初期状態の「心」を意味するものと思われる「第九識」という言葉も用いられている。この点は、『楞伽經』の思想の展開を考察する上で重要になってくるかもしれない。

◇『入楞伽經』(卷 9) 總品第十八之一 T16,565b「依諸邪念法。是故有識生。八九種種識。如水中諸波。(一切 173)」

◇『大乘入楞伽經』(卷 6) 偈頌品第十之初 T16,625a「由虛妄分別。是則有識生。八九識種種。如海眾波浪。(国訳 204)」

### おわりに

小稿では、『楞伽經』が説く「見える」ものや「見えない」ものに関わる内容について初歩的な考察をおこなった。そして、『楞伽經』が説くところは、それぞれ次のような関係にあるらしいことを指摘した。

〈①(広義の)「法身」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③「心」が(広義の)「法身」に変化したもの〉

① = 「我我所」 = 〈(広義の)「法身」〉 = 「真如」 = 「涅槃」 = 「如来藏」  
= 「意成身」 = 「意生身」 = 「意生法身」

② = 「我」 = 〈「真我」〉で、唯一実有なるもの。ただし、見かけ上は、「真我」 = 0

③ = 「我所」 = 〈「心」が(広義の)「法身」に変化したもの〉

なお、「心」 = 「阿頼耶識」 = 「蔵識」 = 「第八識」。ただし、唐訳によれば、厳密には「心」は仮りの名称である。

〈①究極の「法身」〉 = 〈②「真我」〉 + 〈③初期状態の「心」〉

① = 「我我所」 = 〈究極の「法身」〉 = 「円成」

② = 「我」 = 〈「真我」〉で、唯一実有なるもの。ただし、見かけ上は、「真我」 = 0

③ = 「我所」 = 〈初期状態の「心」〉 = 「第九識」 = 「如如」 + 「正智」

なお、〈初期状態の「心」〉 = 「自証聖智」ともとらえられるが、「自証聖智」と「正智」の関係が現在のところ筆者にはよくわからない。

いずれにせよ、『楞伽經』が説くところは、道家系の「道」についての次の式で表されるところに近似するものといえそうである。

〈①(広義の)「道」〉 = 〈②「常道」〉 + 〈③「一なる」もの〉

また、『楞伽經』が説く仏身論は、次の三身である。

①「法身」＝「法仏」＝「自性身」＝「法性仏」＝「真如智慧仏」

②「報身」＝「報仏」＝「受用身」＝「依仏」＝「法性所流仏」

③「化身」＝「化仏」＝「応化仏」＝「応仏」＝「変化仏」

および③化身によって発現される次をあわせての三身四種説ともいい得るものである。

④「化所現身」（「現化身」）

また、とくに法身は、衆生の次元においては、次のような特徴をもつものである。①「見えない」ものである。②廣大無限なるものである。③常なるものである。④樂（すなわち不動不変）なるものではない。⑤空なるものである。⑥そもそもは浄なるものである。したがって、③から⑥をまとめれば、常樂我浄なるものではない。

また、法身のブッダは、自証聖智（すなわち初期状態の心あるいはその成分のようなもの）による三昧の境地（いわば絶対的なものの有り様）を説くとされる。したがって、『楞伽經』は、いわゆる「法身説法」を説く経典である。

また、シャカは、説かない方法をもって説く場合もあったとされる。いわゆる「不説一字」がそれである。筆者は思うに、それは不説をもって「真我」について説いたということであろう。

以上が、小稿における考察の結果である。従来の研究においては、とくに「如来蔵」＝「阿頼耶識」とされてきたが、漢訳『楞伽經』を以上のように読むことが許されれば、如来蔵は我我所に、阿頼耶識は我所に相当するものということになり、厳密には、「如来蔵」≠「阿頼耶識」であることになってしまいそうである。後考を待ちたい。

（2022年3月26日に口頭発表の原稿を加筆修正。）

## 主な引用参考文献など

王俊洪『Prasannapadā 第25章の研究』（東京大学博士(文学)甲第34532号、2018年）。

小野玄妙（編）『佛書解説大辞典』第8巻（大東出版社、1974年）、「智度論」（眞野正順解題）、9-12頁。

小野玄妙（編）『佛書解説大辞典』第11巻（大東出版社、1967年）、「楞伽經」（和田徹城解題）、254-255頁。

鎌田茂雄ほか（編）『大蔵経全解説大事典』（東京、雄山閣出版、1998年）、「大智度論」（笠井哲解説）、409-410頁。

久保田力「『楞伽經』の形態的成立史論：内部構造と原型への視点」（『論集＝RONSHU』11、1984年）、67-96頁。

勝呂信静・下川邊季由（校註）世親釈・玄奘訳『撰大乘論釈』新国訳大蔵経17 瑜伽・唯識部11（大蔵出版、2007年）。

鈴木大拙『鈴木大拙全集』増補新版第5巻（岩波書店、2000年）。

高崎直道・堀内俊郎（校註）『楞伽經（楞伽阿跋多羅宝經）』新国訳大蔵経8、如来蔵・唯識部2（大蔵出版、2015年）。

- 高崎直道『大乘仏教思想論Ⅱ』高崎直道著作集第3巻（春秋社、2009年）。
- 高崎直道『楞伽經』佛典講座17（大蔵出版、1985年）。
- 常盤大定「入楞伽經解題」（『国譯一切經』經集部7、大東出版社、1936年）、62-70頁。
- 中村元『佛教語大辞典』上巻（東京書籍、1975年）。
- 船山徹『婆藪槃豆伝：インド仏教思想家ヴァスバンドゥの伝記』（法蔵館、2021年）。
- 船山徹『六朝隋唐仏教展開史』（法蔵館、2019年）。
- 船山徹『仏教の聖者：史実と願望の記録』京大人文研東方学叢書8（臨川書店、2019年）。
- 船山徹「六朝時代における菩薩戒の受容過程：劉宋・南齊期を中心に」（『東方學報』67、1995年）、1-135頁。
- 水谷真成（訳）『大唐西域記』中国古典文学大系第22巻（平凡社、1971年）。
- 安井広済（訳）『入楞伽經：梵文和訳』（法蔵館、1976年）。
- 山上曹源「大乘入楞伽經解題」（『國譯大藏經』經部第4巻、國民文庫刊行會、1927年）1-36頁。
- 渡辺照宏「真如」（『インドの思想』著作集第1巻（筑摩書房、1982年）、65-103頁）。
- 雷德侯「崗山：佛陀説法之山」（『中国美術学院学報・双月刊』30-1、2009年）、11-17頁。
- Suzuki, Daisetz Teitaro: *The Lankavatara Sutra*.
- [http://lirs.ru/do/lanka\\_eng/lanka-nondiaccritical.htm](http://lirs.ru/do/lanka_eng/lanka-nondiaccritical.htm)
- Sotomura, Ataru: *The Buddhist Heavens 天: Source Manual for Iconographic Research on the Buddhist Universe, Part II*, Singapore: Nalanda-Sriwijaya Centre Working Paper No. 18, 2015.
- [http://www.iseas.edu.sg/images/pdf/nsc\\_working\\_paper\\_series\\_18.pdf](http://www.iseas.edu.sg/images/pdf/nsc_working_paper_series_18.pdf)

## 後記

本研究発表のための考察準備において、船山徹氏、重田みち氏から貴重な助言をいただいた。また、基本情報の収集において、『大智度論』に関しては魏藝氏に、『金光明経』に関しては大平理紗氏にご協力いただいた。記して御礼を申し上げます。